茨城県笠間市

塙谷遺跡

県営畑地帯総合整備事業に
伴う発掘調査報告書

2008

笠間市教育委員会
株式会社 地域文化財コンサルタント

茨城県笠間市

塙谷遺跡

県営畑地帯総合整備事業に
伴う発掘調査報告書

２００８

笠　間　市　教　育　委　員　会
株式会社 地域文化財コンサルタント

巻頭図版

調査区全景（東から）

１号竪穴出土遺物

序

笠間市は，茨城県のほぼ中央に位置し，北西部には八溝山系が，南西部には愛宕山・難台山・館岸山が連なり，中央を北西部から東部にかけて涸沼川が台地を潤す自然豊かな地域です。また，河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから，原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畑地帯総合整備事業に関わる発掘調査であります。この調査の結果，弥生・古墳時代の遺跡が確認され，地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。

この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成20年11月

塙谷遺跡発掘調査会長
笠間市教育委員会教育長
飯　島　　勇

例　言

1．本書は，茨城県笠間市小原字468外に所在する塙谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は，県営畑地帯総合整備事業に伴い，記録保存を目的として実施されたものである。

3．現地調査から報告書刊行に至る業務は，塙谷遺跡発掘調査会より依頼を受けた株式会社地域文化財コンサルタントが，同調査会と笠間市教育委員会の指導の下に実施した。

4．遺跡の所在地・調査面積・調査期間は下記の通りである。

調査期間　　発掘調査：平成20年2月4日～3月1日　整理：平成20年9月1日～11月15日

調査面積　　1,535㎡

5．本調査に関わる　塙谷遺跡発掘調査会組織は以下の通りである。

役　職	氏　名	職　名
会　長	飯島　勇	笠間市教育委員会教育長
副会長	寺内　寛	笠間市文化財保護審議会副会長
〃	小坂　浩	笠間市教育委員会生涯学習課長
理　事	檜山成勇	笠間市文化財保護審議会委員
〃	深谷　忠	〃
〃	南　秀利	〃
〃	幾浦忠男	〃
監　事	河原井規夫	生涯学習課国民文化祭推進室長
幹　事	石井　淳	生涯学習課文化振興ｸﾞﾙｰﾌﾟ主査
〃	根本　薫	生涯学習課文化振興ｸﾞﾙｰﾌﾟ係長
〃	小林　聡	生涯学習課文化振興ｸﾞﾙｰﾌﾟ文化財保護主事
〃	川松祐市	生涯学習課文化振興ｸﾞﾙｰﾌﾟ主幹
指導委員会委員長	川崎純徳	茨城県埋蔵文化財指導員
指導委員会副委員長	能島清光	笠間市文化財審議委員
調査団長（主任調査員）	高野浩之	㈱地域文化財コンサルタント

6．現地調査担当者は以下の通りである。

試掘調査　能島清光（笠間市文化財審議委員）　本調査　高野浩之（㈱地域文化財コンサルタント）

7．本書の作成にあたっては，野村浩史・増田香理・飯田貴代子・斎藤千佐乃・山﨑幸子・柏千枝子・大越慶子・野口千代美の協力を得た。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章－第1節　笠間市教育委員会　　第Ⅰ章－第2節・第Ⅱ章～第Ⅴ章　髙野浩之

8．本調査で得られた資料（出土遺物・図面・写真等）は笠間市教育委員会が保管している。各資料の取り扱い方法については，末尾に記載してある。

9．本調査及び報告書作成に際し，下記の諸氏・諸機関よりご指導・ご協力を賜った。記してここに感謝を申し上げる。（順不同・敬称略）

能島清光　川崎純徳　海老澤　稔　斎藤弘道　土生朗治　㈱海老重建設　芦田和義

10．発掘調査参加者は以下の通りである。（順不同）

飯田　昭　小坂部克己　吹野　昇　豊島英則　青木　誠　大山年明　三河博志

備海桂一　鈴木晃好　小田倉　恵　高田幸江　飯田貴代子　斎藤千佐乃　山﨑幸子

凡　例

1．本書で使用した地図は，国土地理院発行5万分の1地形図及び2万5千分の1地形図，笠間市発行2千5百分の1と同地図を5千分の1に加工したもの。試掘図は1千分の1である。

2．実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次の通りである。

SI…住居跡　SK…土坑　P…ピット　SD…溝　K…撹乱・木根等

3．実測図の縮尺は各図に記載してある。

4．土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5．遺構一覧表・遺物観察表の表記は（　）内数値が現存値を，〔　〕内数値は推定値を表す。計測値単位はcm，gで示した。

目 次

序
例　言・凡　例
目　次
第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査経過
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　調査の概要
第１節　試掘調査 …… 5
第２節　調査の方法 …… 6
第３節　基本堆積土層 …… 6
第Ⅳ章　検出された遺構と遺物
第１節　遺跡の概要 …… 9
第２節　遺構 …… 10
第３節　出土遺物 …… 23
第Ⅴ章　総　括 …… 37
第１節　住居形態と規模の差異について …… 37
第２節　塙谷遺跡の出土遺物について …… 38
第３節　塙谷遺跡における集落の変遷について …… 39
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　調査地と周辺遺跡図Ａ …… 2
第２図　調査地と周辺遺跡図Ｂ …… 3
第３図　調査地と遺跡位置図 …… 4
第４図　試掘調査図 …… 5
第５図　基本堆積土層図 …… 6
第６図　遺構全体図 …… 7・8
第７図　調査区域図 …… 9
第８図　１号住居実測図 …… 10
第９図　２号住居実測図 …… 11
第10図　３号住居実測図 …… 12
第11図　４号住居実測図 …… 13
第12図　５号住居実測図 …… 14
第13図　６号住居実測図 …… 15
第14図　７号住居実測図 …… 16
第15図　８号住居実測図 …… 17
第16図　９号住居実測図 …… 18
第17図　10号住居実測図 …… 19
第18図　１号竪穴実測図 …… 20
第19図　土坑実測図 …… 21
第20図　１号溝位置図 …… 22
第21図　１号溝実測図 …… 23
第22図　１～２号住居出土遺物実測図 …… 24
第23図　２号住居出土遺物実測図 …… 25
第24図　２～５号住居出土遺物実測図 …… 26
第25図　５～９号住居出土遺物実測図 …… 27
第26図　９～11号住居出土遺物実測図 …… 28
第27図　１号竪穴出土遺物実測図 …… 29
第28図　１号竪穴・１号土坑・遺構外遺物実測図 …… 30
第29図　塙谷遺跡集落変遷図 …… 36
第30図　住居形態・出土遺物の変遷概念図 …… 41

表 目 次

第１表　土坑一覧表 ……22
第２表　出土遺物観察表（土器）……31
第３表　出土遺物観察表（土・石製品）……35
第４表　出土遺物観察表（石器）……35
第５表　出土遺物観察表（金属製品）……35

写真図版目次

写真図版１　調査区全景（上・北）
調査区全景（上・北）

写真図版２　１号住居全景（南東から）
１号住居遺物出土状況（東から）
１号住居炉近景（南東から）
１号住居炉断面（南西から）
２号住居全景（西から）
２号住居遺物出土状況（南から）
２号住居遺物出土状況（南から）
２号住居炉近景（西から）

写真図版３　３号住居全景（南東から）
３号住居炉近景（南西から）
４号住居全景（南東から）
４号住居炉近景（北東から）
５号住居全景（南西から）
５号住居遺物出土状況（東から）
５号住居遺物出土状況（東から）
５号住居炉近景（南西から）

写真図版４　６号住居全景･遺物出土状況（南東から）
６号住居 Pit-4 断面（南西から）
７号住居全景（南東から）
７号住居炉全景（北東から）
８号住居炉近景（南東から）
９号住居遺物出土状況（南東から）
９号住居遺物出土状況（南西から）
９号住居炉近景（北東から）

写真図版５　10 号住居全景（南東から）
10 号住居炉近景（北西から）
１号竪穴全景（南東から）
１号竪穴遺物出土状況（南東から）
１号竪穴遺物出土状況（南西から）
１号竪穴遺物出土状況（西から）
１･10 号住居･１号竪穴全景(南東から)
１号溝全景（南から）

写真図版６　１号土坑全景（南から）
１号土坑土層断面（南から）
２・５・６号土坑全景（南東から）
３号土坑全景（南東から）
３号土坑土層断面（南東から）
６・７・８号土坑全景（南東から）
10・11 号土坑全景（西から）
12・13 号土坑全景（東から）

写真図版７　１・２号住居・遺構外遺物

写真図版８　２～４号住居遺物

写真図版９　５～９号住居遺物

写真図版10　10号住居・1号竪穴・１号土坑遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査経過

第１節　調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は，農業に伴う道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって，作物品質の向上，生産作物の拡大，反収の増加，輸送費の削減，荷傷みの防止など，より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め，農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また，農業生産基盤の整備の一環として，旧友部町時代の平成13年に小原地区土地改良組合が設立され，県の指導の下，効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり，重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年１月に三本松遺跡の発掘調査，翌年１月に小原遺跡の発掘調査が行われ，多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は塙谷遺跡の範囲内であることから，友部町教育委員会（現笠間市教育委員会）は平成17年12月に笠間市文化財審議委員の能島清光氏に試掘確認の調査を依頼した。その結果トレンチから２軒の住居跡が確認され，出土遺物などから弥生時代から古墳時代の集落があることが推定された。

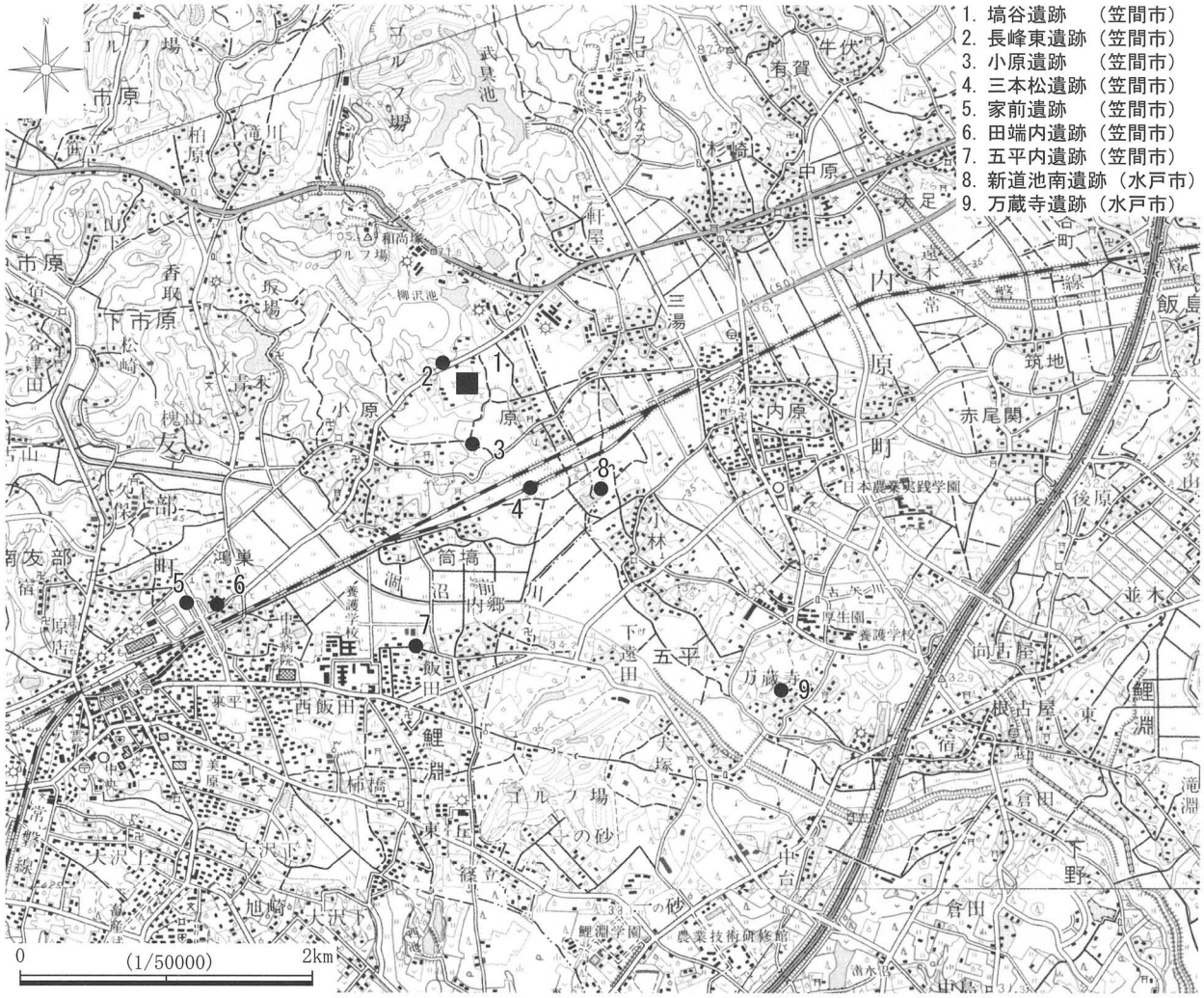
工事主体者である水戸土地改良事務所は，茨城県教育委員会教育長に対して，平成19年７月10日付けで塙谷遺跡について文化財保護法94条第１項の規定に基づき，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要と判断し，平成19年11月２日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて，笠間市教育委員会は生涯学習課内に「塙谷遺跡発掘調査会」を設立し，平成20年１月23日付けで文化財保護法第92条第１項の規定による発掘調査届け出を茨城県教育委員会へ提出，茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏と笠間市文化財保護審議委員の能島清光氏を指導委員として平成20年２月４日より発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査経過

２月４日に調査を開始する。４日から６日にかけて表土除去を行った。７日より作業員を投入し，テント等休憩施設を設置した後，遺構確認作業を開始した。確認の段階では住居跡が９軒以上所在するものと判断された。８日より遺構の掘り下げを開始する。掘り下げは３～５号住居より行い，それぞれの住居にかかる木根の除去と並行して，順次住居の掘り下げを優先して調査を進めた。13日，前日までの調査に加え２号住居の掘り下げを開始する。この日調査会の視察を受けている。14日，３号住居の床面精査と炉の掘り下げを行い，調査を完了している。15日，4･5号住居の床面と壁の精査，併せて１号土坑及び１号溝の掘り下げを開始する。17日までには4･5号住居のピット・炉の掘り下げを完了し，次いで18日には9･10号住居の掘り下げを開始する。２号住居では多量に出土した遺物の取り上げ作業を行い，床面精査の作業へ移行する。20日，６号住居の掘り下げと7･8号住居の精査。22日になり１号住居，１号竪穴の掘り下げを開始する。26日には２～10号住居の調査を完了している。27日，１号住居・１号竪穴の掘り下げを継続し，並行して掘り下げの残る10～14号土坑の掘り下げを行った。28日，１号住居の炉の調査をもって，調査区における全ての遺構調査を完了する。29日，午前中，全体精査を行った後ラジコンヘリコプターによる空撮を行う。午後，教育委員会の終了確認を受ける。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境



第１図　涸沼前川流域の主な弥生時代包蔵地 (1)

第１節　地理的環境

塙谷遺跡は，旧笠間市，旧岩間町，旧友部町の３市町が合併した笠間市に所在し，旧友部町の北東端部にあたる小原地区に位置している。

笠間市は，茨城県のほぼ中央にあたり，西に桜川市，東に水戸市，北は城里町と一部栃木県堺，南は石岡市と小美玉市の一部にそれぞれ接している。笠間市の地形は，市域北部から西部にかけての旧笠間市側は八溝山系鶏足山塊の山岳丘陵地が主となり，東部から南部にかけては旧友部町の標高 30 ～ 40 ｍの東茨城台地と呼ばれる台地が主となって，茨城町から大洗町まで広がっている。この地形に導かれるように，旧七会村山地付近に源流を持った涸沼川が，旧笠間市の中央から旧岩間町・旧友部町の境を貫け，涸沼へと注いでいる。また，市域西部では飯田川や片庭川，稲田川，市域東部では涸沼前川や枝折川に合流する中小河川が涸沼川に合流し，それぞれの流域で低地が形成されている。

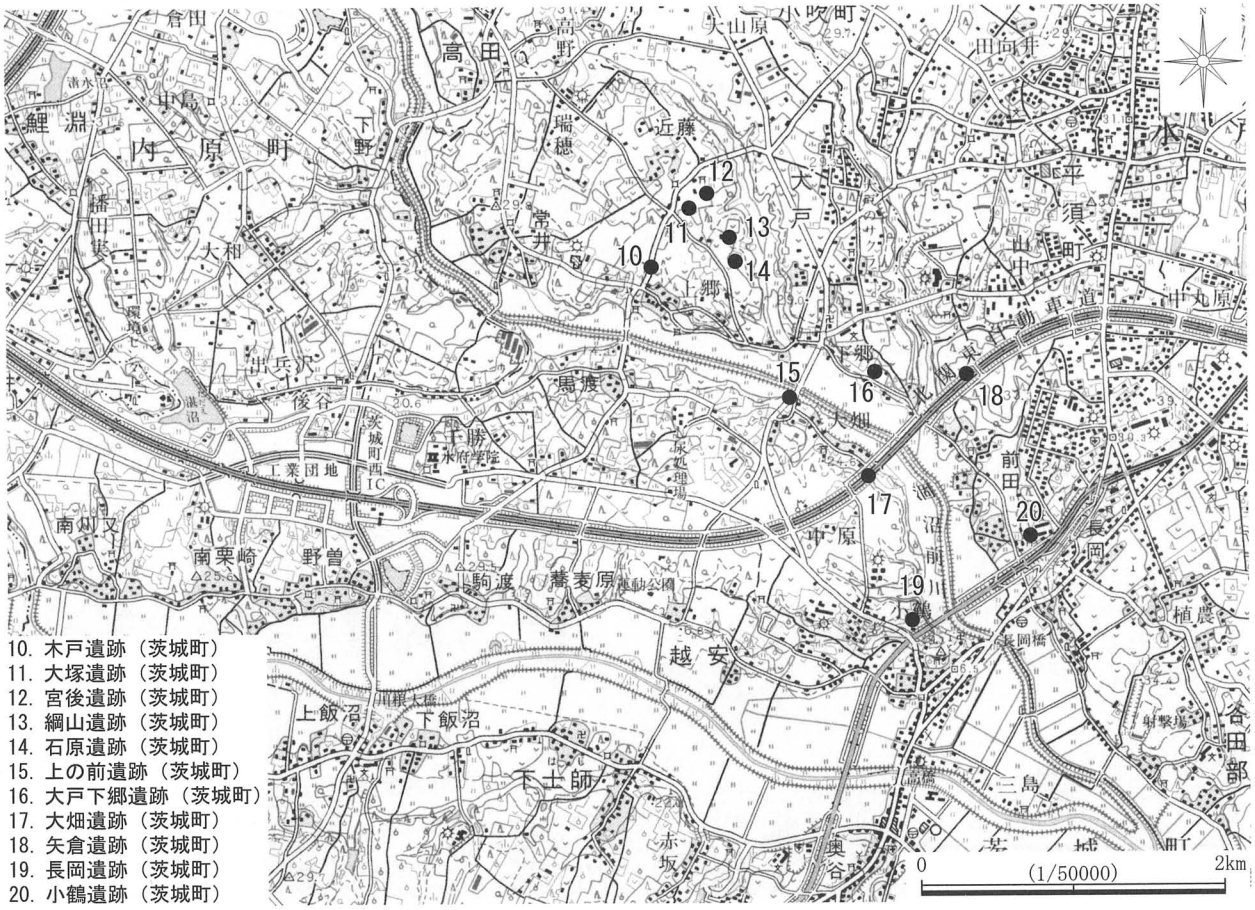
塙谷遺跡は涸沼前川流域の小原地区にあり，傾斜 90％が 3％未満の緩やかな丘陵地で，周辺は水戸市の旧内原町に続く平地林の目立つ場所となっている。今回の調査区は，涸沼前川の左岸に位置しており，本河川低地から派生する開析谷が多く入り込んだ小支谷沿いにあり，標高 39 ～ 41 ｍの丘陵地最先端部に立地している。谷津を挟んで周辺対岸には同様の丘陵地を一望することができる。

第２節　歴史的環境

笠間市では，旧３市町の周知の遺跡総数が 434 箇所と膨大な数にのぼる。その中にあって今回の調査で主体となった弥生時代後期の集落について，涸沼前川流域の遺跡を市域外も含めて概観する。

涸沼前川は，旧友部町の北部，上市原の山内山周辺を水源とし，中市原・下市原や小原の水田地帯を東流している。市域の弥生時代散布地については『友部町史』によると，涸沼前川の源流に近い上市原で弥生の散布が認められるのを始め，８箇所の散布地が周知されており，今回調査が行われた塙谷遺跡周辺の小原地区もその中に含まれている。その後，涸沼前川右岸の久保塚遺跡では，はじめて住居跡の調査が行われている。近年になって，小原地区の丘陵地では数次に亘る調査が行われ，発達した小支谷縁辺における弥生時代から古代にかけての痕跡が明らかになっている。小原遺跡や三本松遺跡の調査においては，弥生時代後期の住居跡を伴った集落が確認されており，塙谷遺跡に西側に隣接する遺跡からも同様の成果が期待される。小原地区に加えて，喜塚前古墳周辺や原坪遺跡など周辺に散布地が点在するところを見ると，この区域の大規模な弥生集落の広がりが示唆されるところである。

涸沼前川を下って笠間市域外に目を転じてみると，本河川は小原地区から水戸市の南西端（旧内原町域）を抜けて茨城町北部をさらに東流し，涸沼川に合流して涸沼へと至る。旧内原町内では涸沼前川流域での本格的な調査は実施されていないものの，五平周辺の万蔵寺遺跡をはじめ，鯉渕周辺の遺跡でも弥生土器の散布が確認されている。さらに下って，小原地区から東方約８～9km 地点には茨城町の大戸遺跡群が所在する。大戸遺跡群は，段丘の右岸に大畑遺跡，左岸に矢倉遺跡，大塚遺跡，石原遺跡，宮後遺跡，大戸下郷遺跡等の県内でも代表的な遺跡によって形成された遺跡群であり，特に，矢倉・大畑・大戸下郷遺跡の調査では弥生時代後期の集落として良好な資料が得られており，それぞれが若干の時期差を有して営まれた状況が報告されている。大戸遺跡群からさらに下ると，標識となった「長岡式土器」を持つ長岡遺跡が所在し，小鶴遺跡でも弥生住居跡の調査が行われている。これらのことから，弥生時代後期の解明にとって，涸沼前川流域は重要な区域となっていることが理解される。



第２図　涸沼前川流域の主な弥生時代包蔵地 (2)

第3図　調査地と遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　試掘調査

今回の事業に際し，事前の試掘調査が笠間市文化財審議委員・能島清光氏によって，３期にわたり行われている。

確認調査報告書によると，今回の調査区は切土Ｃ地区にあたり，植樹等の制約を受けた中にあって，樹木間の若干広めになっている部分にトレンチ１本が入れられている（第４図参照）。

調査の結果，住居跡２軒の落ち込みが検出されたが，保存状況は不明とされている。出土遺物は事前の分布調査で弥生土器片が採取されているものの，調査時には出土していない。

この試掘調査で確認された住居跡は，今回の本調査で５号住居と６号住居の重複であることが判明している。

第４図　試掘調査図（Ｃ地区）

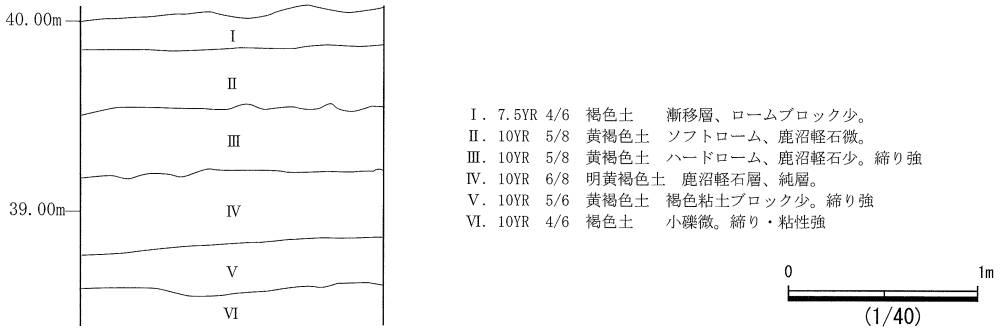
第２節　調査の方法

調査は，試掘調査の結果に基づき設定された 1,535 ㎡を発掘調査対象範囲として実施した。実施にあたっては，笠間市埋蔵文化財発掘調査業務共通仕様書に則って行っている。

表土除去は重機を使用し，遺構確認面までを掘り下げ，その後，遺構確認から遺構の掘り下げについては人力で行った。基準点は，公共座標第Ⅸ系を使用し，X ＝ 40920，Y ＝ 44770 の交点を基準としたグリッドを設定した。グリッドは北西角を基準とした 10 ｍのグリッドを調査区内に網羅し，西から東にかけてアルファベット A ～ F，北から南にかけて算用数字１～５を当てはめて，A1，A2，A3・・・といった呼称を各グリッドに与えている。記録について，実測は，平面図・断面図ともに 1/20 縮尺を基本とし，溝等の範囲が大きいものに関しては 1/40 縮尺を適用し，全体図は 1/200 縮尺で作成している。出土遺物は破片を点上げで行っているが，形状を留めている遺物については微細図を作成している。写真は，35 ㎜白黒及びカラーリバーサルによって調査の過程で各遺構を撮影し，予備としてデジタルカメラを用いた。空撮はラジコンヘリコプターを使用している。実測及び写真撮影等の記録作業は調査の過程で随時実施した。

第３節　基本堆積土層

基本堆積土層は，調査区のほぼ中央，やや斜面に位置する地点の D3 グリッド内に 2m × 2m の試掘坑を設定した。調査区全体の表土層は耕作土で層厚が 10 ～ 20 ㎝程となり，標高の高い部分ほど表土層厚は薄く，斜面部に移行するほど厚さを増すようである。表土層直下がⅠ層ソフトローム上面で遺構確認面となり，一部漸移層が若干認められる部分もある。Ⅱ層からⅢ層はハードロームとなり，64 ～ 68 ㎝の層厚で堆積し，鹿沼軽石純層に達する。鹿沼土は 36 ～ 40 ㎝の層厚で良好な状態である。Ⅳ層以下のローム層から締りと粘性が強さを増し，Ⅴ層では小礫が含まれるようになる。



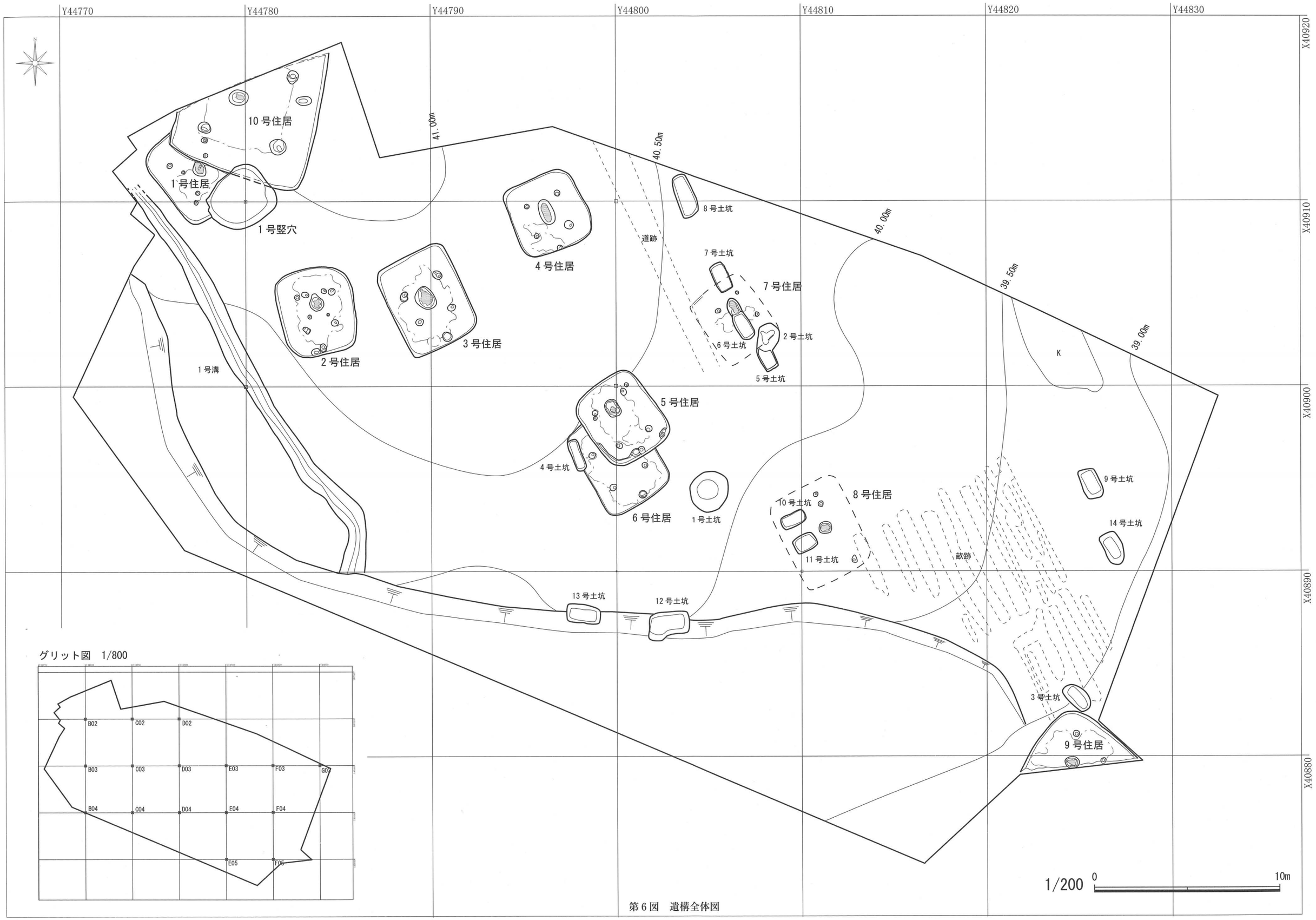
第５図　基本土層図

【参考文献】（第Ⅱ，Ⅲ章）

茨城県　『茨城県資料　考古資料編　弥生時代』 1991 年

川又清明　「涸沼前川流域における弥生時代後期の遺跡の分布状況」『研究ノート９号』 1999 年

峰須紀夫　『茨城県　地学ガイド』 1986 年


Y44770
Y44780
Y44790
Y44800
Y44810
Y44820
Y44830
X40920
X40910
X40900
X40890
X40880
10 号住居
1 号住居
1 号竪穴
41.00m
40.50m
40.00m
39.50m
39.00m
8 号土坑
道跡
7 号土坑
7 号住居
4 号住居
3 号住居
2 号住居
6 号土坑
2 号土坑
5 号土坑
1 号溝
K
5 号住居
4 号土坑
6 号住居
1 号土坑
10 号土坑
8 号住居
9 号土坑
14 号土坑
11 号土坑
畝跡
13 号土坑
12 号土坑
3 号土坑
9 号住居
グリット図 1/800
B02
C02
D02
B03
C03
D03
E03
F03
G03
B04
C04
D04
E04
F04
E05
F05
1/200
0
10m

第 6 図　遺構全体図

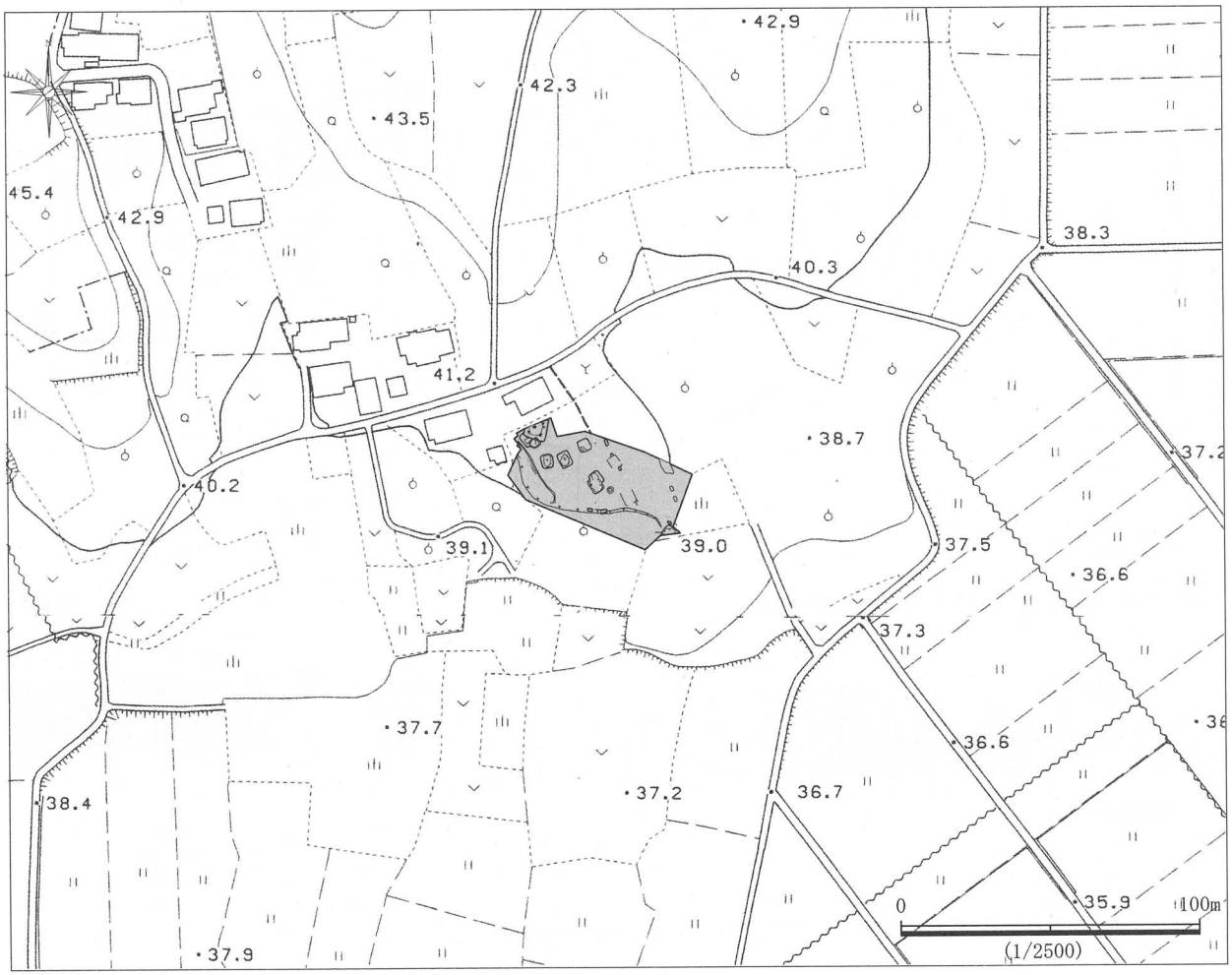
第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

今回の調査で確認された遺構は，縄文時代の陥し穴１基，弥生時代の住居跡 10 軒，竪穴状遺構１基，時期不明の土坑 13 基，溝１条であった。

各遺構は，調査区の中央から西側の立地が最も高い位置に集中して確認されている。南側の段差下は耕作による撹乱が著しく，遺構の確認には至らなかった。現況を見ると，段差下の部分に関しては平坦な地形を呈しているものの，耕作が免れているところではハードローム面が認められることから，以前は段差のない緩傾斜地であったと推測される。また東側の緩斜面地は，南北に伸びる直線的な浅い落ち込みが調査区を分断しており，この落ち込みについては，遺構確認当初は溝跡を想定していたが，轍状の凹凸に加え硬化した部分が確認された事から，道であった可能性が高く，これを境に東側は大部分が削平を受けた状況となっていた。辛うじて掘り込みの深い部分だけが遺存するのみであった。この地点で確認された住居は覆土が飛ばされて，炉や柱穴のみが確認されている南東側の一部で畝状の掘り込みが確認されているが，近現代の陶磁器片が出土していることから，新しい時期の耕作跡と判断され，先述した道跡はこの耕作跡と軸が一致する事から一連の掘り込みと考えられる。

今回は，丘陵台地の先端部のみの調査となったが，北側の台地基部や、浅い谷を挟んだ隣接する丘陵地でも集落の存在が試掘調査によって確認されている。その結果、大規模な集落の存在は明らかであり，本調査区においては，集落のほんの一部であることが理解される。さらに南方に対峙する丘陵地では，弥生時代住居跡の調査事例が 17 軒ほどあり，今回の調査を含め，今後の調査を重ねることが小原地区一帯での集落の展開を考察する上で重要であるものと考える。



第７図　調査区域図

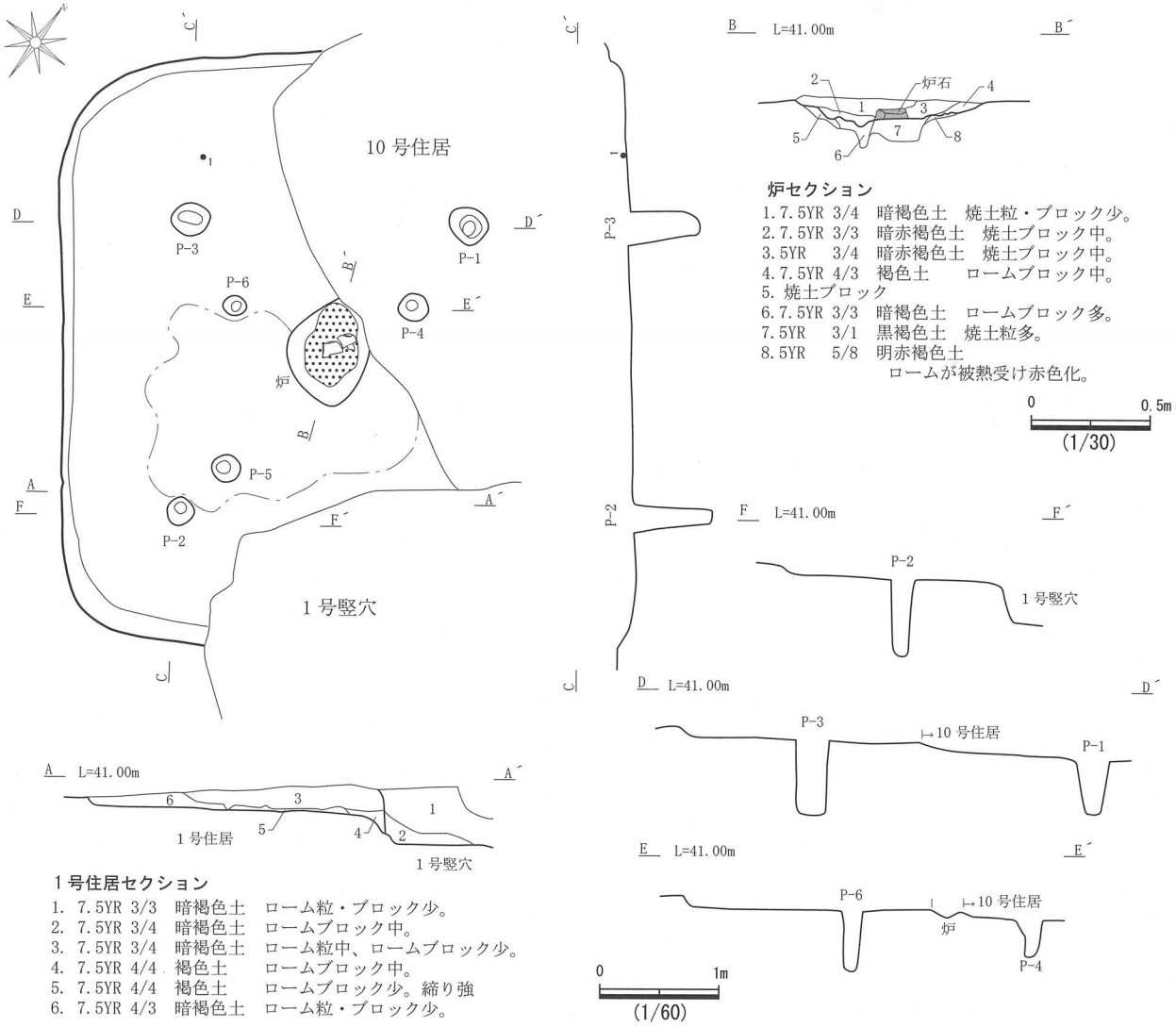
第２節　遺構

(1) 住居跡

１号住居（SI-01：図版第８図・写真図版２）

本跡は，調査区北西端のA1・A2グリッドに位置する。北東側では10号住居に，南東側では１号竪穴と重複し，何れの遺構よりも本跡が古い。残存率は約60％で，住居の形状は概ね隅丸長方形を呈するものと考えられる。規模は，長軸4.94ｍ，短軸は現状確認される範囲で3.30ｍ，壁高は８～11㎝を測り，外傾して立ち上がる。主軸方向は南西壁線より求め，N－39°－Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で，住居南西側部分では硬化が顕著である。炉跡は住居内のほぼ中央で確認され，形状は楕円形を呈する。規模は長径0.90ｍ，短径0.68ｍ，深さ15㎝の掘り込みに、焼土面がほぼ底面に広がっている。焼土中央部には炉石が確認されている。主柱穴はP1～P3が相当し，P1は，10号住居の床面下より確認されたが，南東側では確認することができなかった。この主柱穴を結ぶ対角線上の内側で，主柱穴より規模の小さいピットP4～P6が確認され，拡張が施される以前の柱穴と捉えられる。この小ピットは，主柱穴同様に南東側では確認されなかった。

遺物は,弥生後期の壺形土器が主体で出土している。遺物の総点数は155点でほとんどが壺形土器の破片である。出土状況は，東側が消滅しているため全体を網羅する事はできないが，P-3の北側に形状を留めた壺形土器が出土している。

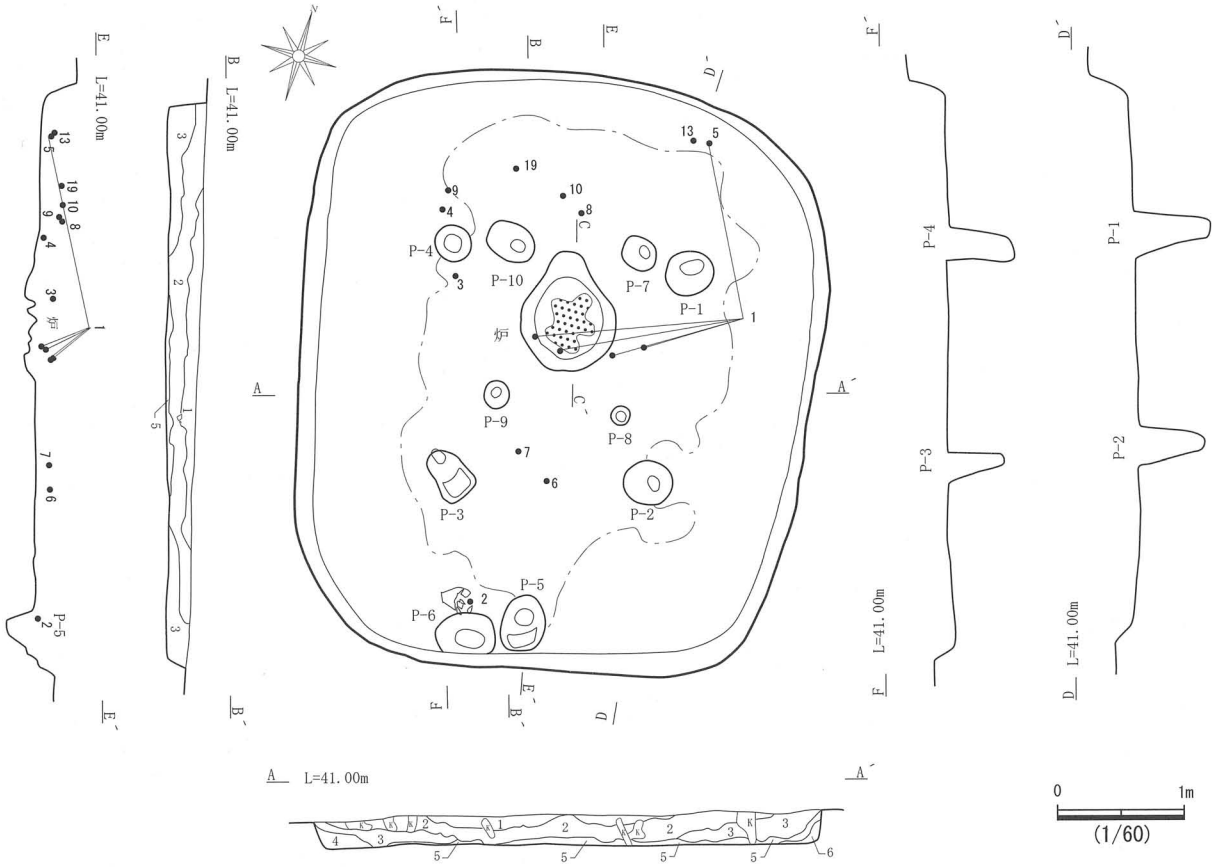


第８図　１号住居実測図

2号住居（SI-02：図版第9図・写真図版2）

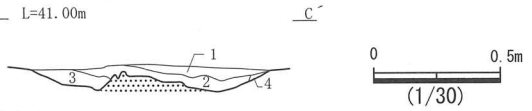
本跡は，調査区西側のB2グリッドに位置する。住居の形状は隅丸長方形であるが，各コーナー部分ではやや丸みが強くなっている。規模は，長軸4.75 m，短軸は4.11 m，壁高は23～25 cmを測り，ほぼ直立して立ち上がる。主軸方向はN－9°－Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で，出入り口から炉周辺にかけて良く踏み締まっている。炉跡は住居内の中央よりやや北側に寄って確認され，形状は楕円形を呈する。規模は長径0.95 m，短径0.76 m，深さ13 cmの掘り込みに，焼土面が底面のほぼ中央に広がっている。主柱穴はP1～P4が相当し，これら主柱穴の内側で規模の小さいピットP7～P10が炉を囲むように確認されている。P8の上面で硬化面が被っていた事から，拡張が施される以前の柱穴と判断される。P5は出入り口に伴うピットと考えられる。P5の西側には隣接して楕円形の浅いP6が確認され，貯蔵穴ではないかと思われる。

遺物は，弥生後期の壺形土器の破片が主体で出土している。遺物の出土点数は383点で，ほとんどが壺形土器の破片であるが，今回調査された住居の中では最も出土量が多い。出土状況は，住居内の覆土中から全域で出土しており，特に炉周辺と炉の南側P-2～P-3間からややまとまって出土する傾向にある。



2号住居セクション

1. 7.5YR 2/2 黒褐色土 ローム粒多。
2. 7.5YR 3/4 暗褐色土 ローム粒少。
3. 7.5YR 4/3 褐色土 ローム粒・ブロック少。
4. 7.5YR 4/4 褐色土 ローム粒・ブロック少。
5. 7.5YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック少。締り強
6. 7.5YR 4/6 褐色土 粘性あり



炉セクション

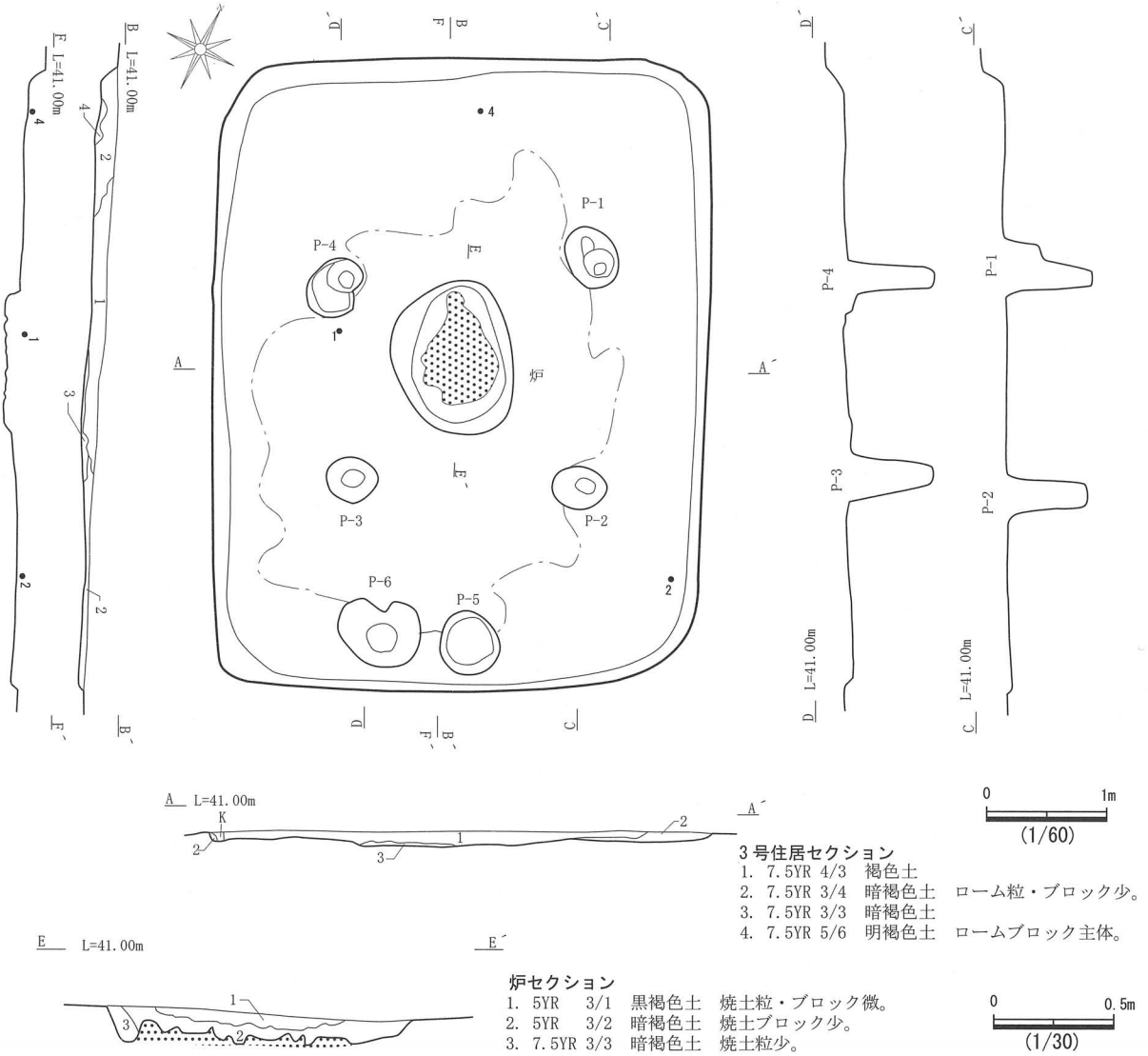
1. 7.5YR 3/3 暗褐色土 焼土粒・ブロック少。
2. 5YR 3/4 暗赤褐色土 焼土粒・ブロック少。
3. 7.5YR 3/4 暗褐色土 ローム粒・ブロック多。
4. 7.5YR 4/3 褐色土 ロームブロック主体、被熱受ける。

第9図 2号住居実測図

3号住居（SI-03：図版第10図・写真図版3）

本跡は，調査区西側のB2・C2グリッドに位置する。形状は隅丸長方形で，各コーナー部分の丸みが強い。住居の規模は，長軸5.28 m，短軸は4.15 m，壁高は6～16 cmを測り，外傾して立ち上がる。主軸方向はN－27°－Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で，出入り口から炉周辺にかけて良く踏み締まっているが，炉の周辺域では壁付近より若干窪んでいる。炉跡は住居内の中央よりやや北側に寄って確認され，形状は楕円形を呈する。規模は長径1.27 m，短径0.98 m，深さ18 cmとやや大型の掘り込みに，焼土面が底面のほぼ全体に広がっている。主柱穴はP1～P4が相当し，住居北側のP1とP4は，上面がやや広がっている。P5は出入り口に伴うピットと考えられ，P5の西側には隣接して不整形な浅いP6が確認されており，貯蔵穴ではないかと思われる。

遺物は，弥生後期壺形土器の破片が主体で出土している。出土総点数は101点。ほとんどが壺形土器の破片で，その内約60%が注記も不可能な極細片の遺物となっている。出土状況は，P-4と炉北側からの出土する傾向が認められる。

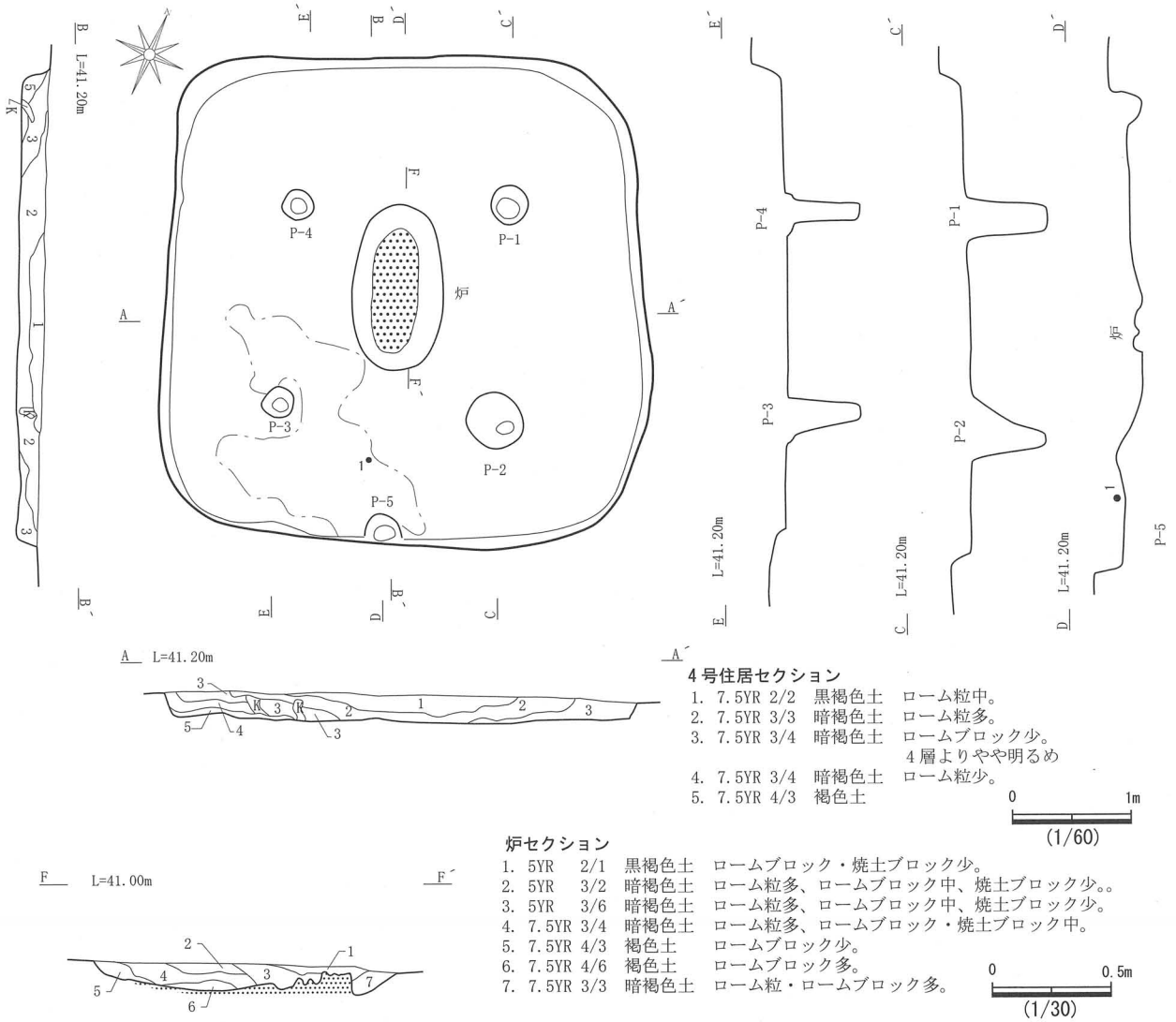


第10図 3号住居実測図

4号住居（SI-04：図版第11図・写真図版3）

本跡は，調査区中央北寄りのC1･C2グリッドに位置する。住居の形状は隅丸方形で，各コーナー部分の丸みが強い。規模は，長軸4.20 m，短軸は4.18 m，壁高は19～21 cmを測り，外傾して立ち上がる。主軸方向はN－27°－Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で，出入り口からP3付近が良く踏み締まっている。炉跡は住居内のほぼ中央で確認され，形状は長楕円形を呈する。規模は長径1.40 m，短径0.76 m，深さ23 cmと住居の規模に対して大きい数値となる。火焼部は底面の炉の南側に認められ，土層や焼土の堆積状況から2期に分かれて使用された可能性が考えられる。また炉北側の縁では床面が若干隆起する状態が認められた。主柱穴はP1～P4が相当し，住居の対角線上に配されている。P5は出入り口に伴うピットと考えられ，南西壁に接している。貯蔵穴らしきピットは確認されていない。

遺物は，弥生後期・壺形土器の破片が主体で出土している。出土総点数は106点でほとんどが細片である。出土状況は，主柱穴内側から出土する傾向にある。

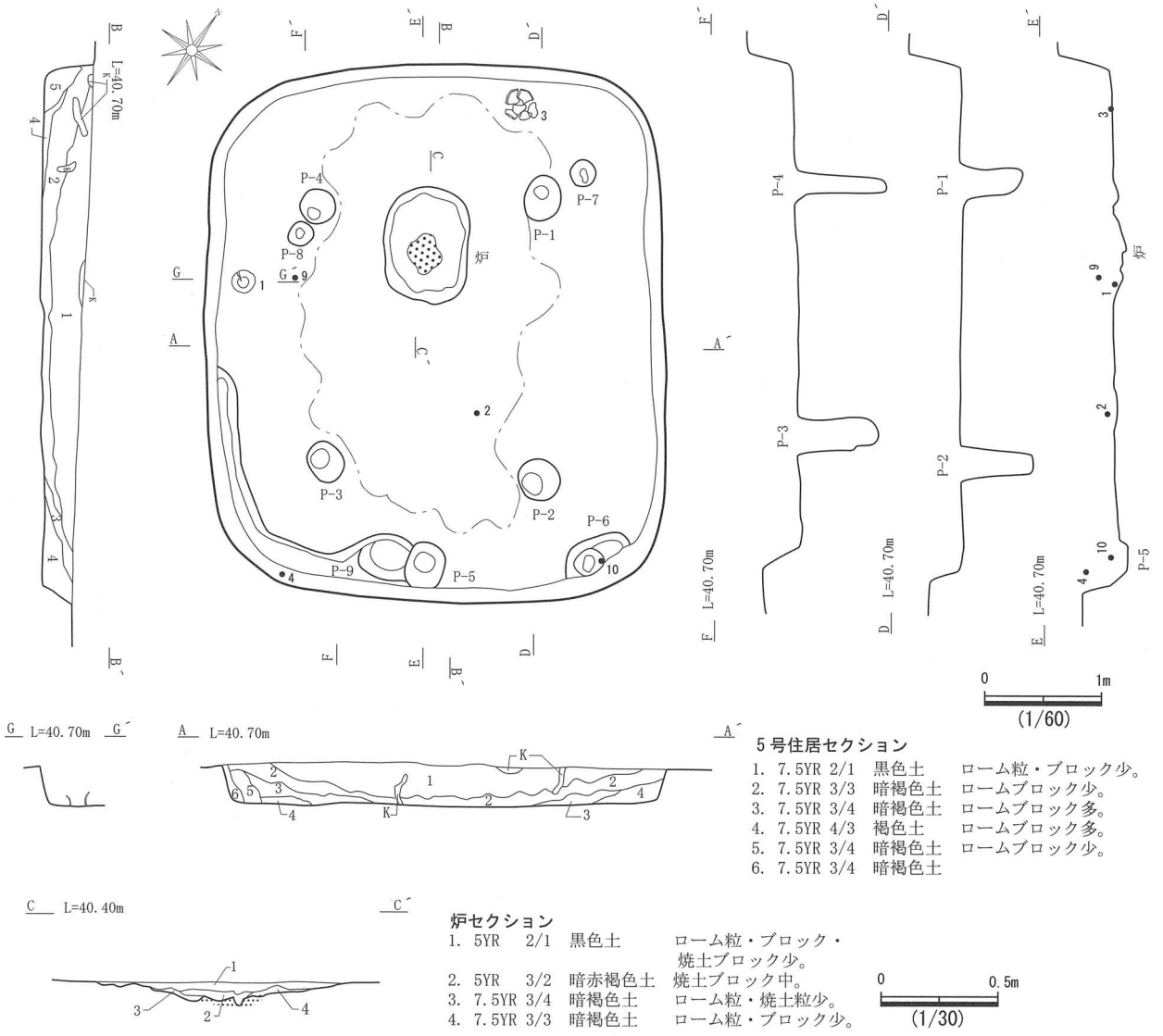


第11図　4号住居実測図

5号住居（SI-05：図版第12図・写真図版3）

本跡は，調査区中央部のC2・C3・D2・D3グリッドにまたがって位置する。南西側では6号住居と重複し，本跡が新しい。住居の形状は隅丸長方形を呈し，各コーナーの丸みが強い。規模は，長軸4.60 m，短軸3.95 m，壁高は26～43 cmを測り，ほぼ直立して立ち上がる。主軸方向はN－34°－Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で，住居中央部でよく踏み締められている。炉跡は住居内の中央やや北寄りのP1・P4間に近い位置で確認され，形状は楕円形を呈する。規模は長径1.00 m，短径0.73 m，深さ15 cmの掘り込みに，焼土面は底面のほぼ中央に認められる。主柱穴はP1～P4が相当し，住居の対角線上に配されている。主柱穴より規模の小さいピットP7はP1の付近で，P8はP4の付近で確認されているが規則性や主柱穴との関連性は見出せず，性格は不明である。P5は南壁に接しており，出入り口施設に伴うピットと思われる。P5に接して確認されたP9は，掘り込みの浅い楕円形を呈したピットで貯蔵穴の可能性が考えられる。住居南壁際では壁溝と思われる落ち込みが確認されており，規模は幅0.09～0.17m，床面からの深さは2～4 cmとなっている。

遺物は，弥生後期壺形土器の破片が主体で出土している。出土遺物の総点数は103点で，覆土の遺存が深い割に出土量は少ない。出土状況は壁際に点在する傾向にある。1は口縁部が正位の状態で出土し，2は北隅付近に押し潰された形で出土している。

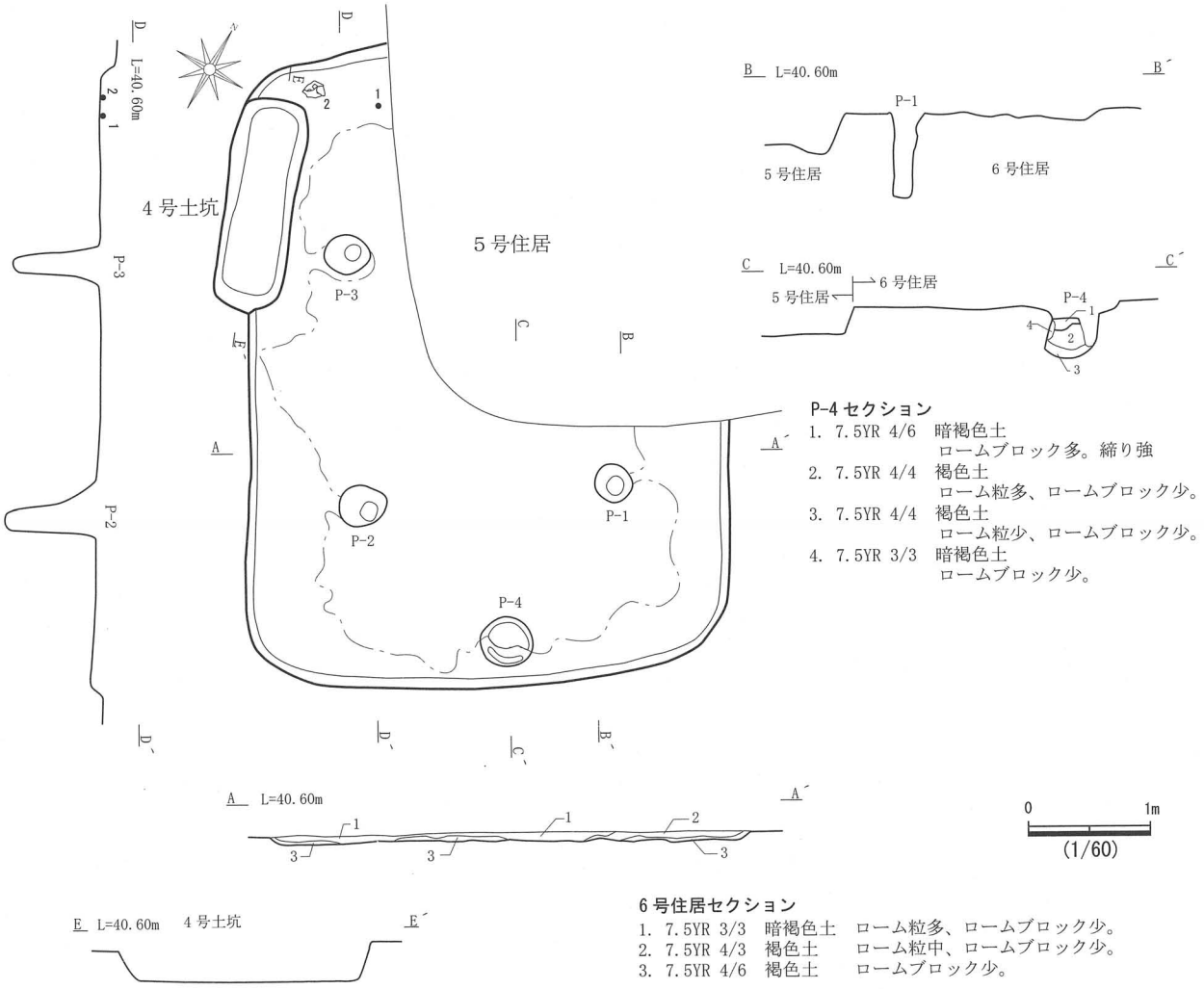


第12図　5号住居実測図

6号住居（SI-06：図版第13図・写真図版4）

本跡は，調査区中央部のC3・D3グリッドに位置する。北東側では5号住居と，北西側では4号土坑と重複し，何れの遺構よりも本跡が古い。住居の形状は隅丸長方形を呈し，規模は，長軸5.25 m，短軸3.96 m，壁高は7～9 cmを測り，外傾して立ち上がる。主軸方向はN－30°－Wを指す。覆土は浅く，壁寄りの堆積状況からレンズ状に堆積した自然堆積層を呈しているものと思われる。床面は直床で，住居内のほぼ全域で踏み締められている。炉跡は5号住居跡の構築時に消失していると考えられ，確認はできなかった。主柱穴はP1～P3が相当し，もう1本の主柱穴は5号住居内の床下より検索を試みたが確認はできなかった。P4は南壁に寄っており，出入り口施設に伴うピットと思われる。

遺物は，弥生後期の壺が主体で出土している。出土遺物の総点数は20点で，住居の3分の2程が消失しているため言及できないが，調査区内の住居では遺物の出土量が最も少ない。住居北コーナー部分に形状を留めた遺物が出土している。

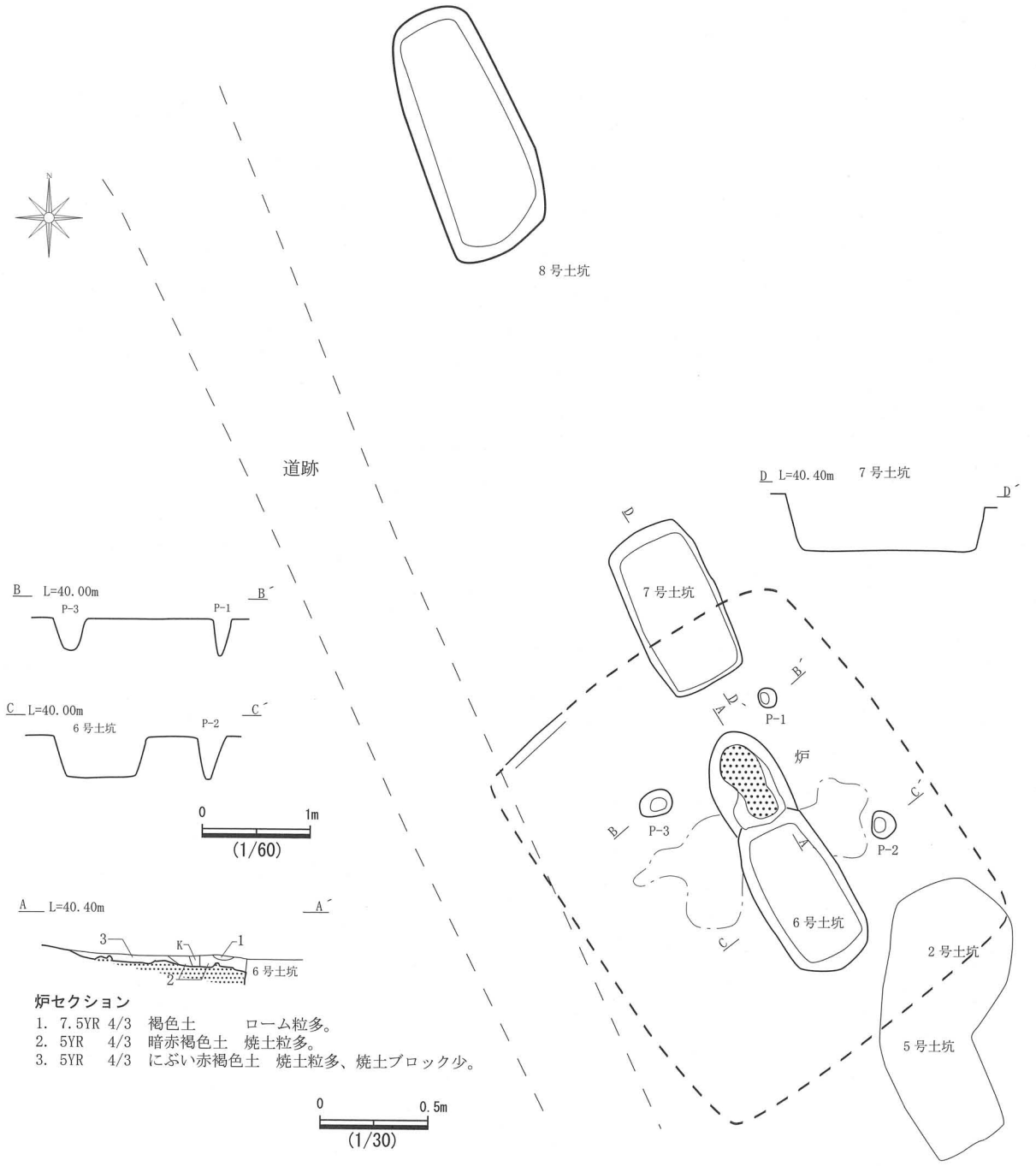


第13図　6号住居実測図

7号住居（SI-07：図版第14図・写真図版4）

本跡は，調査区の東側，C3・D3グリッドに位置する。本跡は、削平が著しいため壁が遺存せず，炉，柱穴，床面を確認するのみとなった。住居のほぼ中央と思われる部分を6･7号土坑が縦列しており，何れの遺構よりも本跡が古い。形状及び住居の規模、覆土は確認不能である。主軸方向は炉の長軸が住居の主軸に即していると考え，N－30°－Wを指すものと思われる。床面は直床で，炉から柱穴と思われる間に踏み締められた跡を確認している。炉跡は形状が楕円形を呈し、規模は南東側が6号土坑に切られているため，長径は現状確認される範囲で0.93ｍ，短径は0.68ｍ，深さ10㎝の掘り込みに，焼土面は底面のほぼ中央に認められる。主柱穴はP1～P3が相当するものと思われる。もう1本の主柱穴や出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。

遺物は，壺形土器の胴部破片が主体で出土しており，出土遺物の総点数は16点で，全て炉からの出土である。重複する土坑内から現代の遺物に混じって弥生土器の破片が出土しているものの，住居に伴う遺物かどうかは不明である。

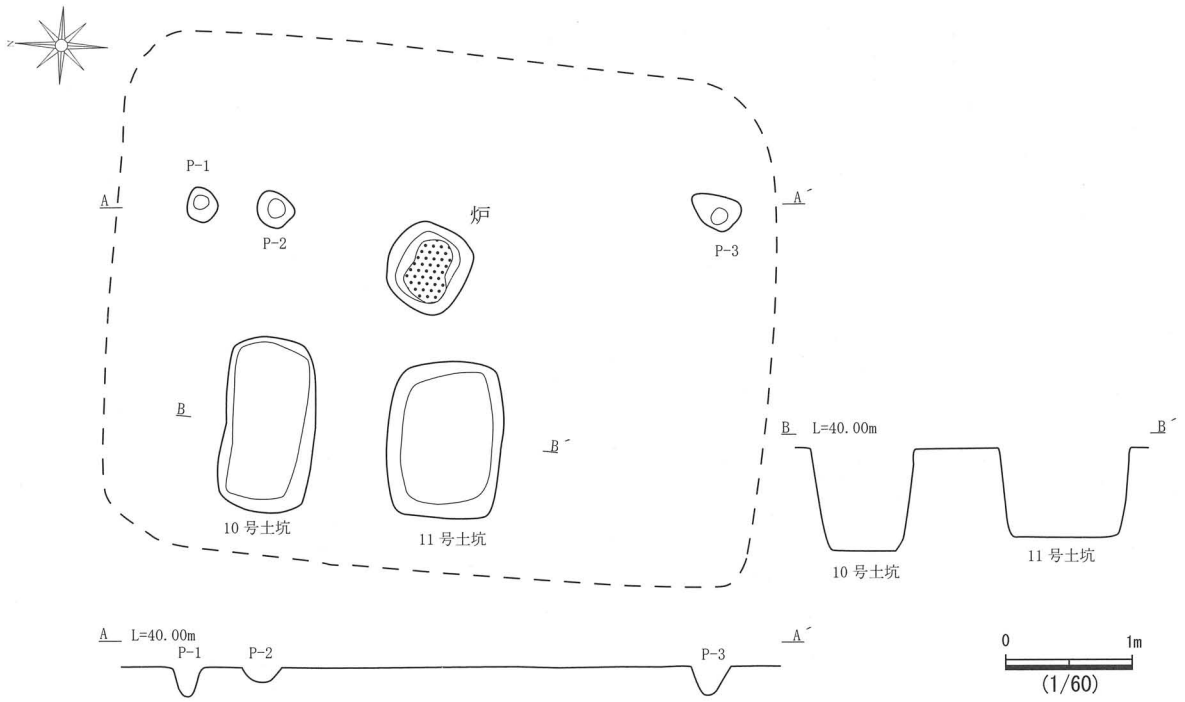


第14図　7号住居・7,8土坑実測図

8号住居（SI-08：図版第15図・写真図版4）

本跡は，調査区中央部のやや北東寄り，D3・E3・E4グリッドに位置する。本跡は，削平が著しいため壁が遺存せず，炉と柱穴らしきピットを確認するのみとなった。炉の西側に隣接して10・11号土坑が所在しており，覆土などから何れの遺構よりも本跡が古いと判断される。住居の形状及び規模，覆土，床面の状態は確認不能である。主軸方向は炉と柱穴の配置状況から判断して，N－30°－W前後を指すものと思われる。炉跡は形状が楕円形を呈し，規模は南東側が6号土坑に切られているため，長径は現状確認される範囲で0.68 m，短径は0.63 m，深さ6 cmの掘り込みに，焼土面は底面のほぼ中央に認められる。ピットはP1～P3が相当するものと考えられるが，掘り込みが浅い事，形状も小規模である事，配置がやや不規則な事などから主柱穴と判断するには困難であった。

遺物は出土していない。

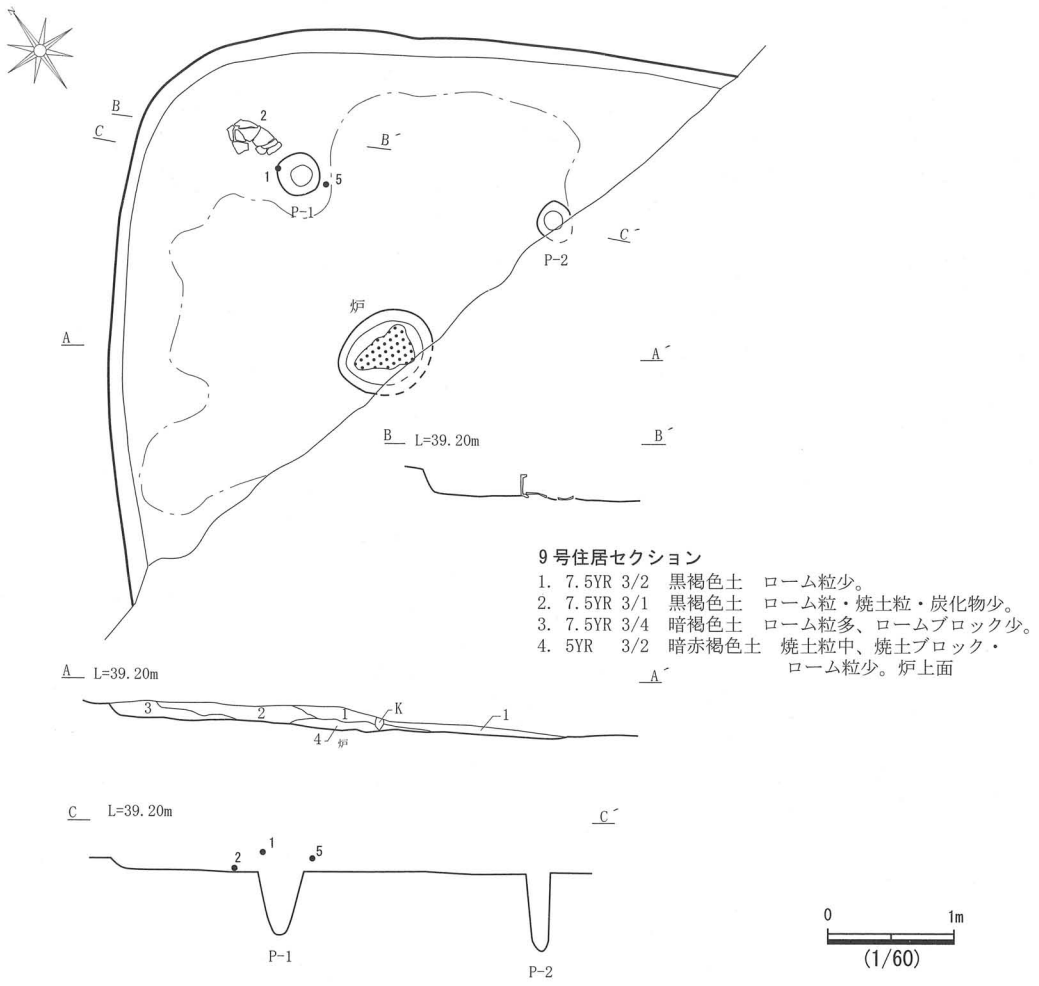


第15図　8号住居実測図

9号住居（SI-09：図版第16図・写真図版4）

本跡は，調査区南東端のF4・F5グリッドに位置する。調査区内で最も低い地点に立地し，南側は撹乱が著しく，形跡を確認するには困難な状況であった。住居の残存率は約60％で，住居の形状は炉や主柱穴の配置から概ね隅丸長方形を呈したものと考えられる。住居の規模は，現状確認される範囲で長軸4.74 m，短軸は4.73 m，壁高は9～10 cmを測り，外傾して立ち上がる。主軸方向は北東壁線より求め，N－34°－Wを指す。覆土は，壁際の状況からレンズ状に堆積する自然堆積層を呈していると思われる。床面は直床で，住居中央部でよく踏み締められている。炉跡は住居内のほぼ中央に配置されていると考えられ，形状は楕円形を呈する。規模は長径0.78 m，短径0.60 m，深さ9～10 cmの掘り込みに，焼土面は底面のほぼ中央に認められる。主柱穴はP1～P2が相当する。残りの主柱穴及び出入り口施設に伴うピットや貯蔵穴は確認されなかった。

遺物は，弥生後期の壺形土器の破片が主体で出土している。出土遺物の総点数は82点で，出土状況は北側隅のP1付近に形状を留める遺物が出土している。

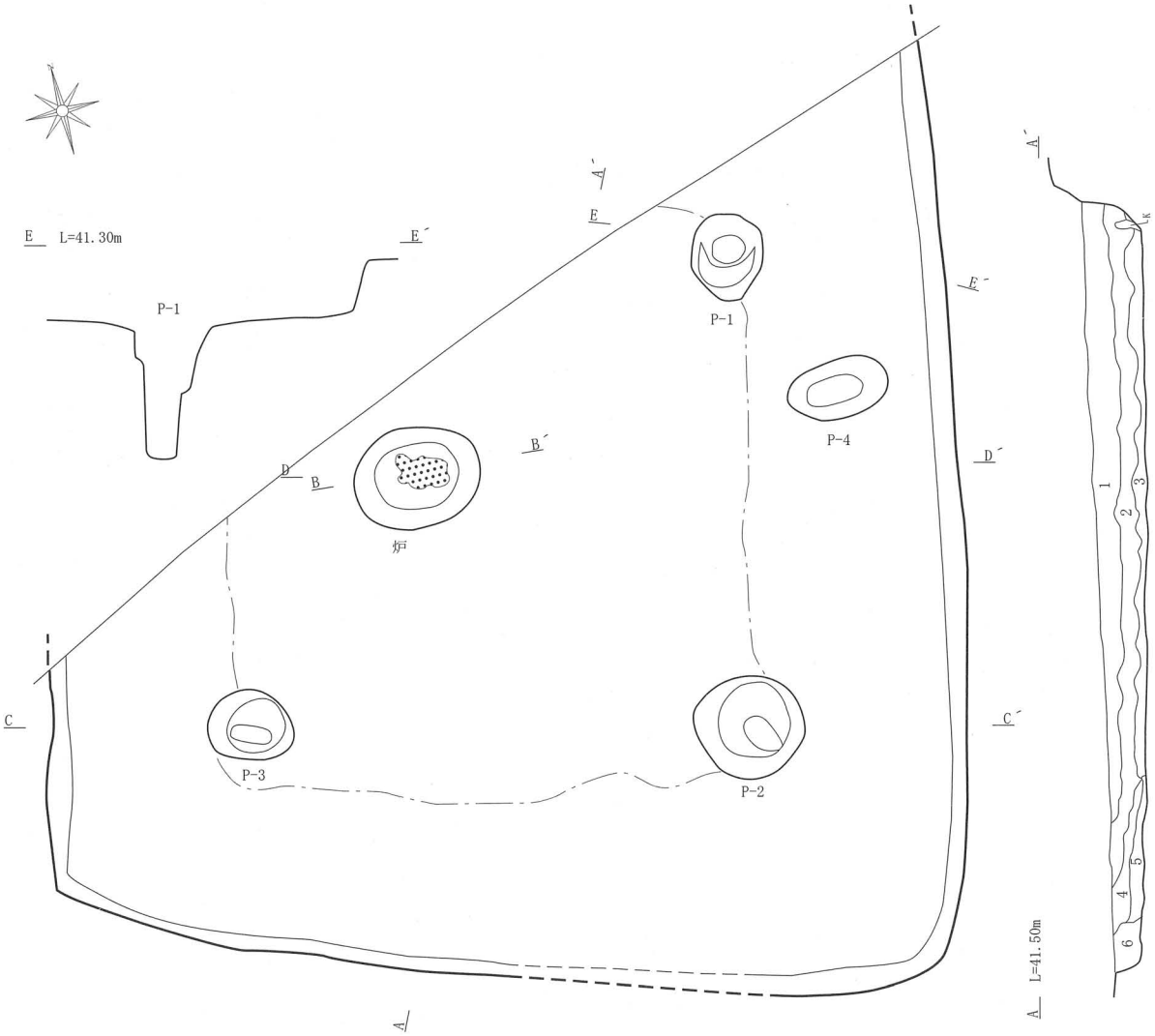


第16図 9号住居実測図

10号住居（SI-10：図版第17図・写真図版5）

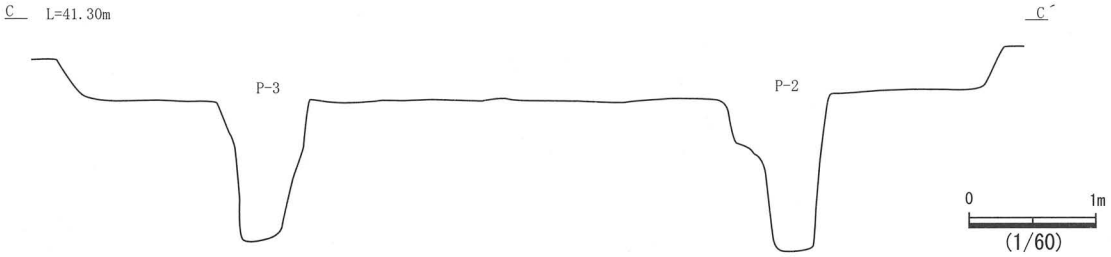
本跡は，調査区北西端のA1・B1グリッドに位置する。本跡の北側は調査区外となり，南西側では1号住居と1号竪穴に重複し，何れの遺構よりも本跡が新しい。残存率は約60％で，住居の形状は炉や主柱穴の配置から，概ね隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は現状確認される範囲で，長軸7.72 m，短軸は7.48 m，壁高は33～35 cmを測り，外傾して立ち上がる。調査区内では最も大型となり，主軸方向は炉の配置状況から短軸にあると考えられ，南壁線より求めた方向はN－70°－Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で，住居中央の主柱穴に囲まれた範囲で硬化が顕著である。炉跡は住居内の中央やや西寄りで確認され，形状は楕円形を呈する。規模は長径1.05 m，短径0.81 m，深さ9 cmの掘り込みに，焼土面が底面のほぼ中央に広がっている。主柱穴はP1～P3が相当し，もう1本の主柱穴は調査区外に遺存するものと思われる。主柱穴の規模は径が0.70～0.90 mを測り，深さも120 cm前後を有する大型である。P4は出入り口施設に伴うものと考えられるが、形状や規模，周囲の床面の状況からやや判断に苦しむところである。

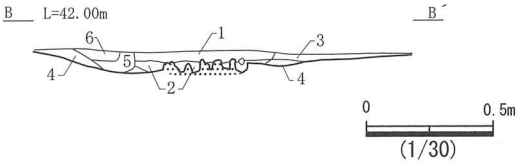
遺物は，弥生後期の壺が主体で出土している。出土遺物の総点数は537点であるが，7割近くが注記も不可能な細片である。出土状況は，覆土中1層から2層にかけての出土が主でほぼ均一に出土しており，覆土中第2層中からの出土が若干多目である。



10号住居セクション

1. 7.5YR 1/2　黒色土　ローム粒少。
2. 7.5YR 3/1　黒褐色土　ローム粒・ブロック少。
3. 7.5YR 3/3　暗褐色土　ローム粒中、ロームブロック少。
4. 7.5YR 3/3　暗褐色土　ローム粒少。
5. 7.5YR 3/3　暗褐色土　ローム粒少。
6. 7.5YR 4/3　ローム粒少、焼土粒微。





炉セクション

1. 5YR　3/2　暗赤褐色土　焼土粒少。
2. 5YR　3/4　暗赤褐色土　ロームブロック多、焼土ブロック少。
3. 7.5YR 3/2　黒褐色土　ロームブロック少。
4. 7.5YR 3/4　暗褐色土　ローム粒多、ロームブロック少。
5. 5YR　3/4　暗赤褐色土　ロームブロック多、焼土ブロック少。
6. 5YR　3/2　暗赤褐色土　焼土ブロック少。

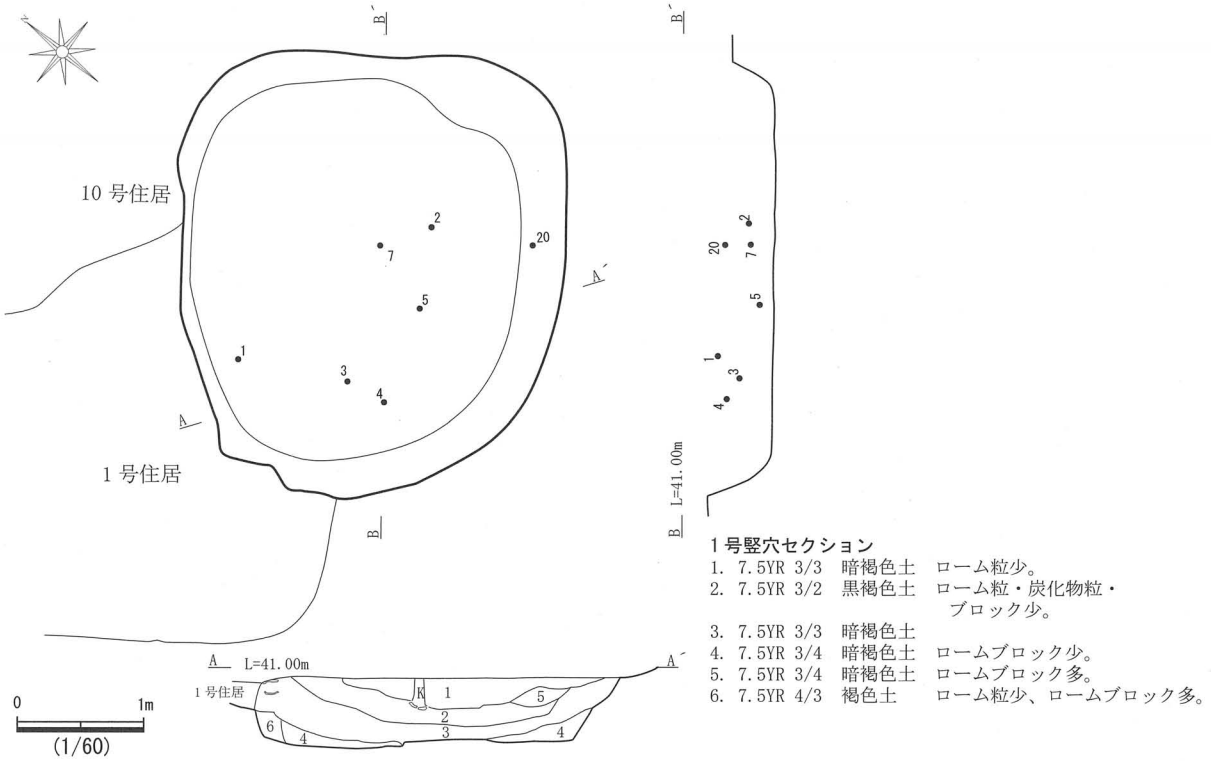
第17図　10号住居実測図

（2）竪穴

1号竪穴（SI-11：図版第18図・写真図版5）

本跡は，調査区北西端のA1・A2・B1・B2グリッドにまたがって位置する。北側から北西側にかけて1号住居と10号住居に重複し，10号住居より古く，1号住居より新しい。竪穴の形状は概ね隅丸方形を呈するが、各コーナー部分が丸みを持ち，やや楕円形に近い形となっている。規模は、長軸3.54 m，短軸は3.04 m，壁高は50 cmを測り，外傾して立ち上がる。主軸方向は北西壁線より求め，N－39°－Eを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は平坦であるが，特に踏みしまった部分は見当たらず，炉跡や主柱穴、出入り口等の住居に伴う施設は確認されなかった。本跡は当初、住居であると考えられたため，SI-11として調査していたものであるが，炉や柱穴等住居に伴う構築物が確認されなかった事や，規模が小さかった事から竪穴状遺構として扱う事とした。

遺物は，弥生後期の壺形土器が主体で出土している。出土遺物の総点数は1202点をかぞえ，調査区内の遺構の中で最も多くの出土量を持つが，その内の半分は注記の施せない細片である。出土状況は、上層からの出土が最も多く，1～2層中の出土が大部分となっている。特に形状を留める遺物ほど上層からの出土となり，投棄されたものと考えられる。



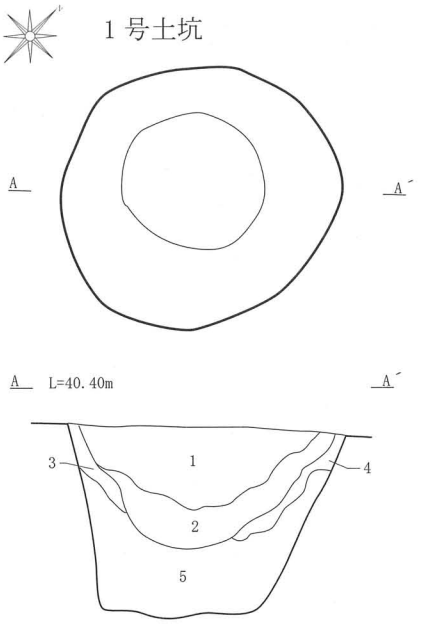
第18図　1号竪穴実測図

（3）土坑（SK：図版第14・15・19図・写真図版6）

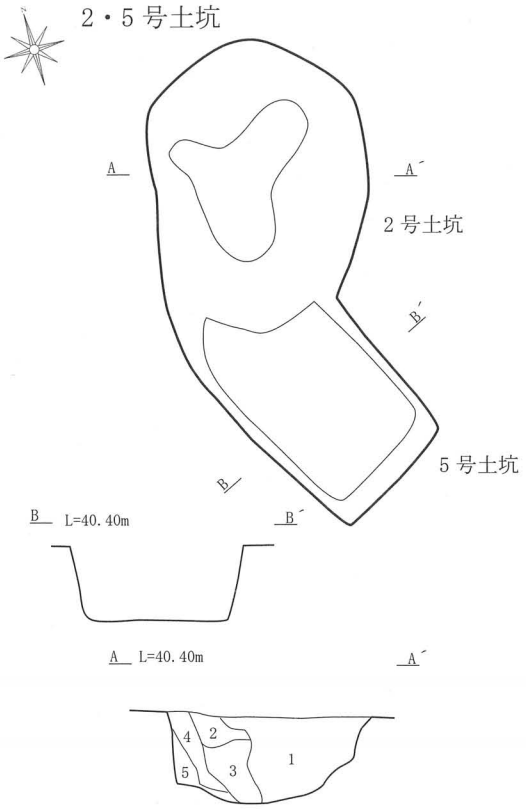
土坑は，調査区内において14基確認されている。それぞれの土坑は，平面形状から円形（1号土坑）、長方形（3～14号土坑），不整形（2号土坑）に3区分されている。

1号土坑は調査区内で，唯一円筒状を呈した土坑で，出土遺物は覆土の最も上層部分より敲き石が出土しているのみである。井戸の可能性が指摘される。2号土坑も当初は円形を呈するものと思われたが，不整形な形状で，覆土中に鹿沼軽石などを多量に含み，層位の逆転現象が認められている事から，風倒木痕と判断される。3号土坑は平面形状が長方形を呈するが，断面形状がやや先細りとなり，深さも約1m有することから陥し穴の可能性がある。4～14号土坑は箱型の土坑で，2～4基程の集合体で規則的な配置を見せている。いずれの土坑も，黒色土に多量のロームブロックを含んだ締まりの弱い覆土である。その内9号土坑の覆土中からは，昭和18年発行の1銭硬貨が出土した事から，4～14号土坑は現代の所産と考えるのが妥当と思われる。

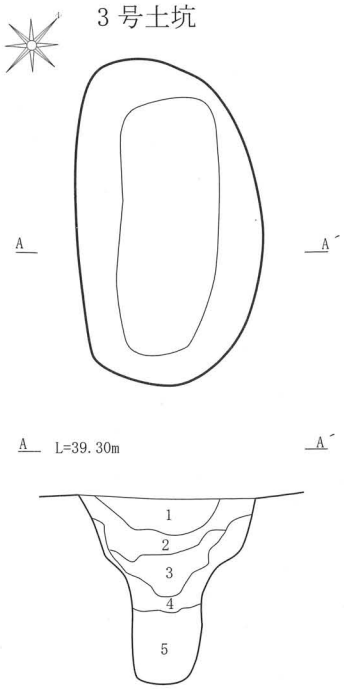
各土坑の規模や形状については第1表・土坑一覧表に記載してある。



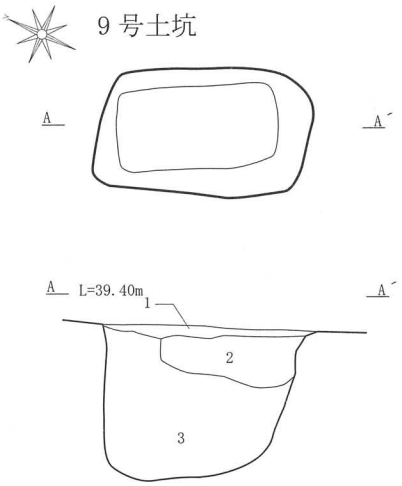
1. 7.5YR 3/2　黒褐色土　ローム粒少。
2. 7.5YR 3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック少。
3. 7.5YR 3/3　暗褐色土　ローム粒・ブロック少。
4. 7.5YR 4/3　褐色土　ロームブロック少。
5. 7.5YR 3/2　黒褐色土　ロームブロック中、鹿沼軽石少。



1. 7.5YR 4/3　褐色土　ローム粒・ブロック多。
2. 7.5YR 3/4　暗褐色土　ローム粒多、ブロック少。
3. 7.5YR 3/1　黒褐色土　ローム粒少。
4. 7.5YR 3/3　暗褐色土　ロームブロック少。
5. 7.5YR 4/3　褐色土　ローム粒少。



1. 10YR 3/2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒少。
2. 10YR 3/3　暗褐色土　ローム粒多、軽石粒中。締り強
3. 10YR 3/4　暗褐色土　ローム粒・軽石粒多。締り強
4. 7.5YR 4/6　褐色土　ロームブロック少。
5. 7.5YR 4/4　褐色土　ロームブロック少。



1. 7.5YR 4/3　褐色土　ローム粒少。
2. 7.5YR 3/3　暗褐色土　ローム粒・ブロック多。
3. 7.5YR 3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多、ローム極大ブロック少。

0　1m
(1/40)

第19図　1,2,3,5,9号土坑実測図

第1表　土坑一覧表

＜　＞は推定値

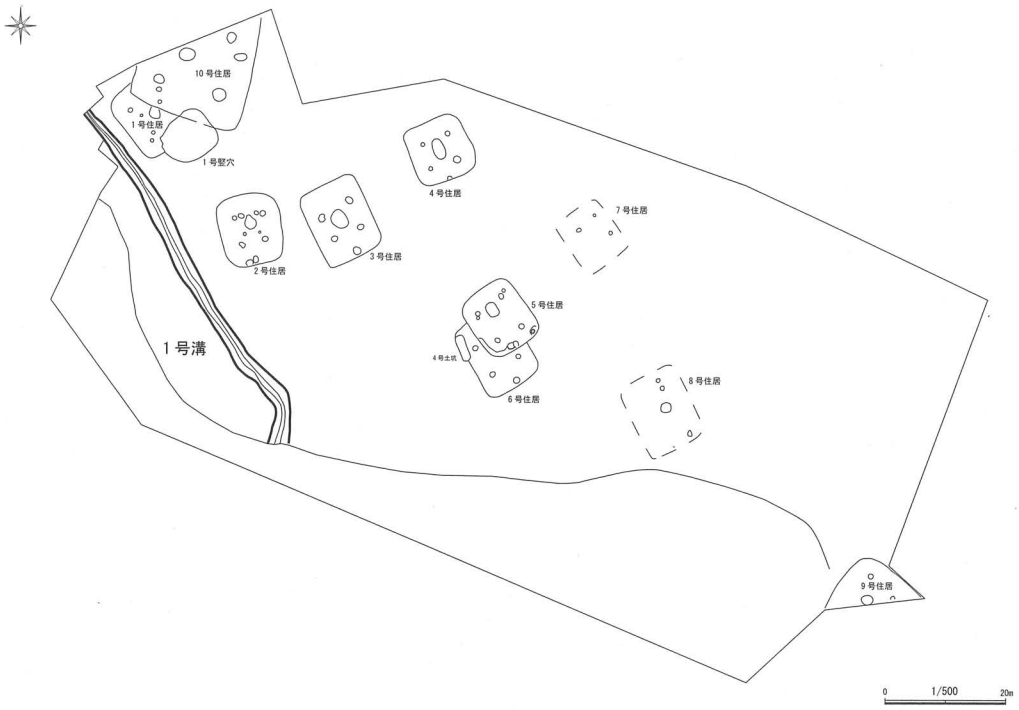
遺構	位置 (グリッド)	形状 (平面・断面)	規模 (長軸×短軸×深さ) cm	主軸	備考
SK-01	D3	円形・筒状	157 × 137 × 172	N-59°-E	井戸の可能性あり。
SK-02	D2	不整形・不整	152 × 115 × 44	N-13°-E	風倒木痕と思われる。
SK-03	F4	長楕円形	172 × 98 × 97	N-46°-W	陥し穴。
SK-04	C3	長方形	178 × 59 × 27	N-21°-W	6号住居と重複。本跡が新しい。
SK-05	D2	長方形	＜120＞× 82 × 24	N-29°-W	
SK-06	D2	長方形	148 × 83 × 38	N-25°-W	
SK-07	D2	長方形	155 × 84 × 43	N-28°-W	
SK-08	D1・D2	長方形	118 × 52 × 54	N-28°-W	昭和18年発行1銭硬貨出土
SK-09	F3	長方形	112 × 67 × 79	N-24°-W	
SK-10	D3・E3	長方形	138 × 73 × 70	N-61°-E	
SK-11	D3・E3	長方形	125 × 92 × 60	N-64°-E	
SK-12	D4	長方形	145 × 81 × 42	N-84°-E	
SK-13	C4	長方形	124 × 65 × 40	N-31°-W	
SK-14	F3	長方形	122 × 68 × 43	N-35°-W	

(4) 溝

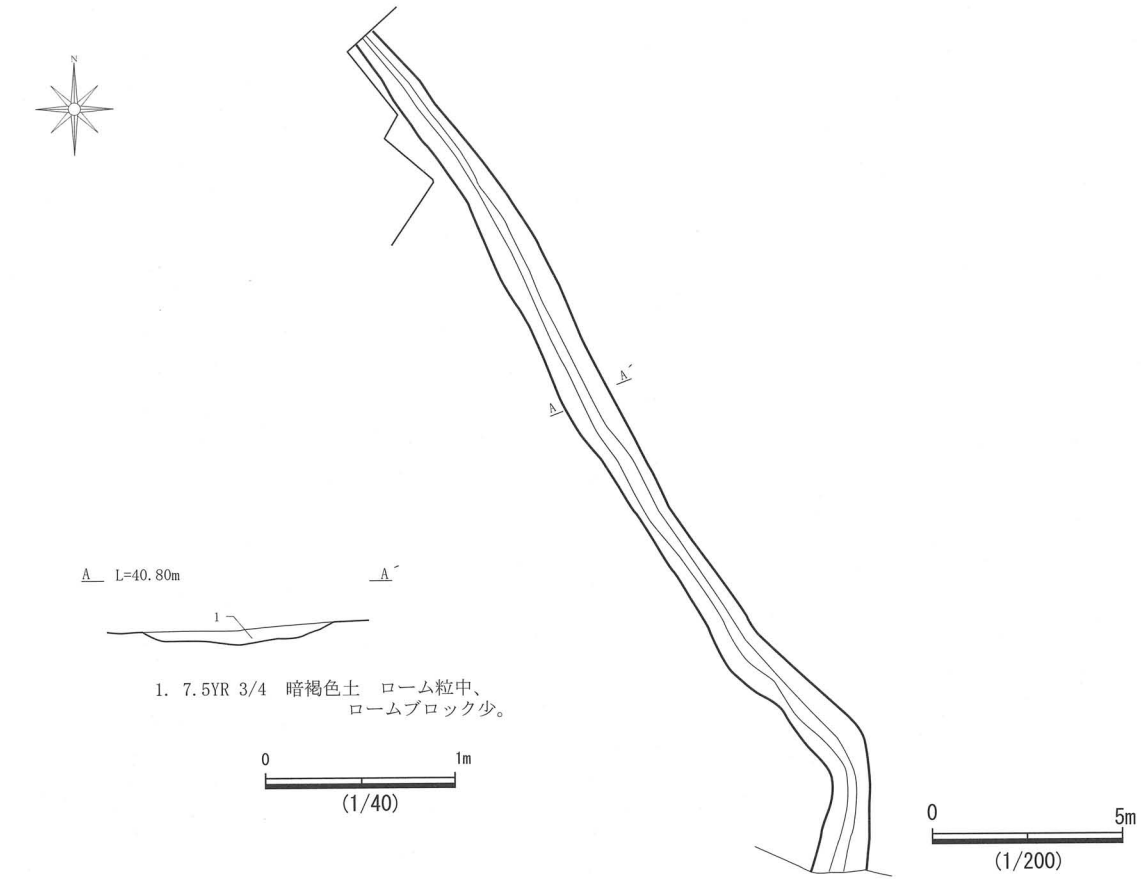
1号溝（SD-01：図版第20・21図・写真図版5）

本跡は，調査区西端のA1・A2・B3に亘って所在する。調査区の頂部から西側に向かって傾斜する斜面地を遮る形で横切っている。溝の断面形状は浅い幅広のV字状を呈し，規模は，確認される範囲での全長が26 m以上，北側は調査区外に延び，南側は段差面で削り取られたようである。走行方向はN－70°－W、段差に至る直前でN－15°－Eに方向を変えている。幅は0.21～0.62 mで斜面部ほど広くなる傾向にあり，深さは13～15 cmとなる。覆土は浅く，単層のみの確認である。

遺物は，弥生土器片が主体で出土し，出土遺物の総点数は46点で，ほとんどが細片である。溝の北端では弥生後期・壺形土器の破片が覆土中より出土している。



第20図　1号溝位置図



第21図 1号溝実測図

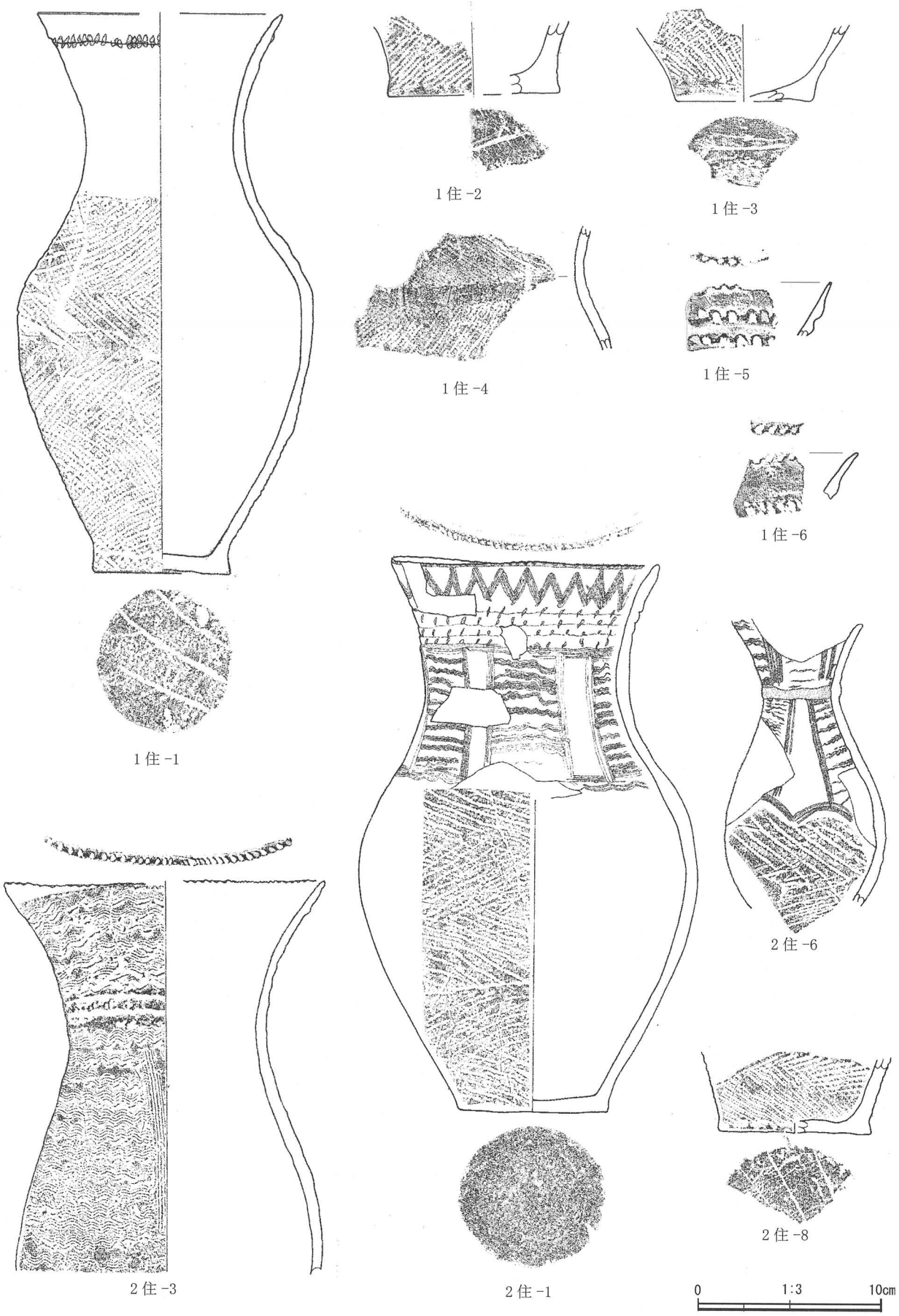
第3節 出土遺物

今回の出土遺物は，ほとんどが住居跡からの出土遺物である。

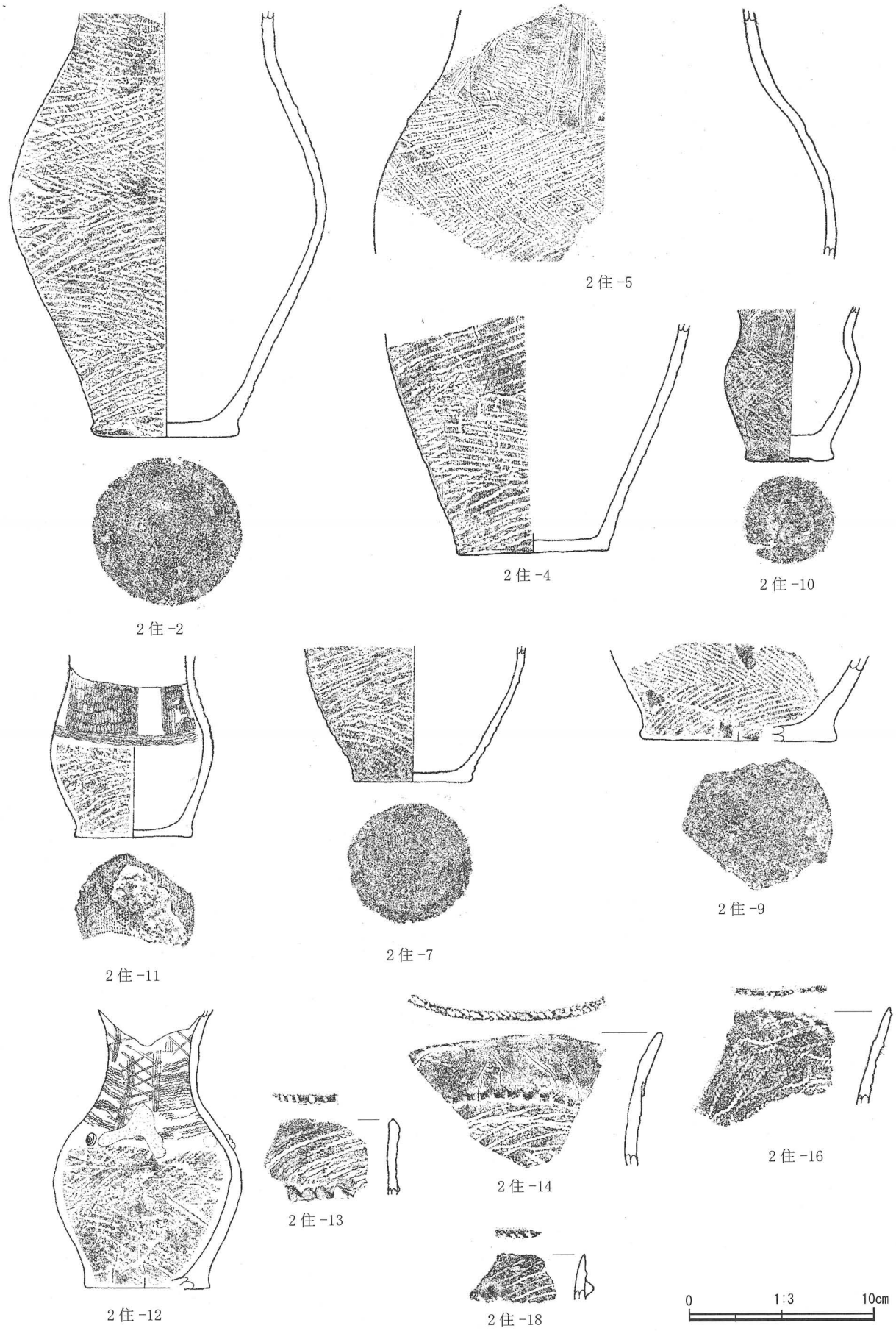
土器は，弥生時代の壺形土器の破片が大半で小破片が主体となっている。本書には，接合により形状を留めたもの及び住居の時期が特定される破片を中心に図示し，内容については出土遺物観察表（第2表～第4表）に記載してある。

弥生時代の遺物は，後期後半の土器片が主体で出土している。口縁部では，口唇部に縄文原体を押圧しているものと，ヘラ状工具による刻みを施しているものがあり，前者の施文が多く見受けられる。口縁部下端の隆帯にも縄文原体を押圧しているものが多く認められる。頸部片は櫛歯状工具による櫛描文が主体となり，櫛歯の状態から，複数の系統が混在しているものと考えられる。胴部片は付加条縄文の施文されたものがほとんどで，全体的には2種が多く出土しているが，1種も比較的多く認められる。その内の大半は羽状構成をとっている。若干ではあるが，単節縄文を施したものも出土している。頸部片や胴部片における縄文の施文内容から，異系統の土器が混在することが明らかであり，中には地元土器と異系統の土器の技法が融合するものも確認されている。

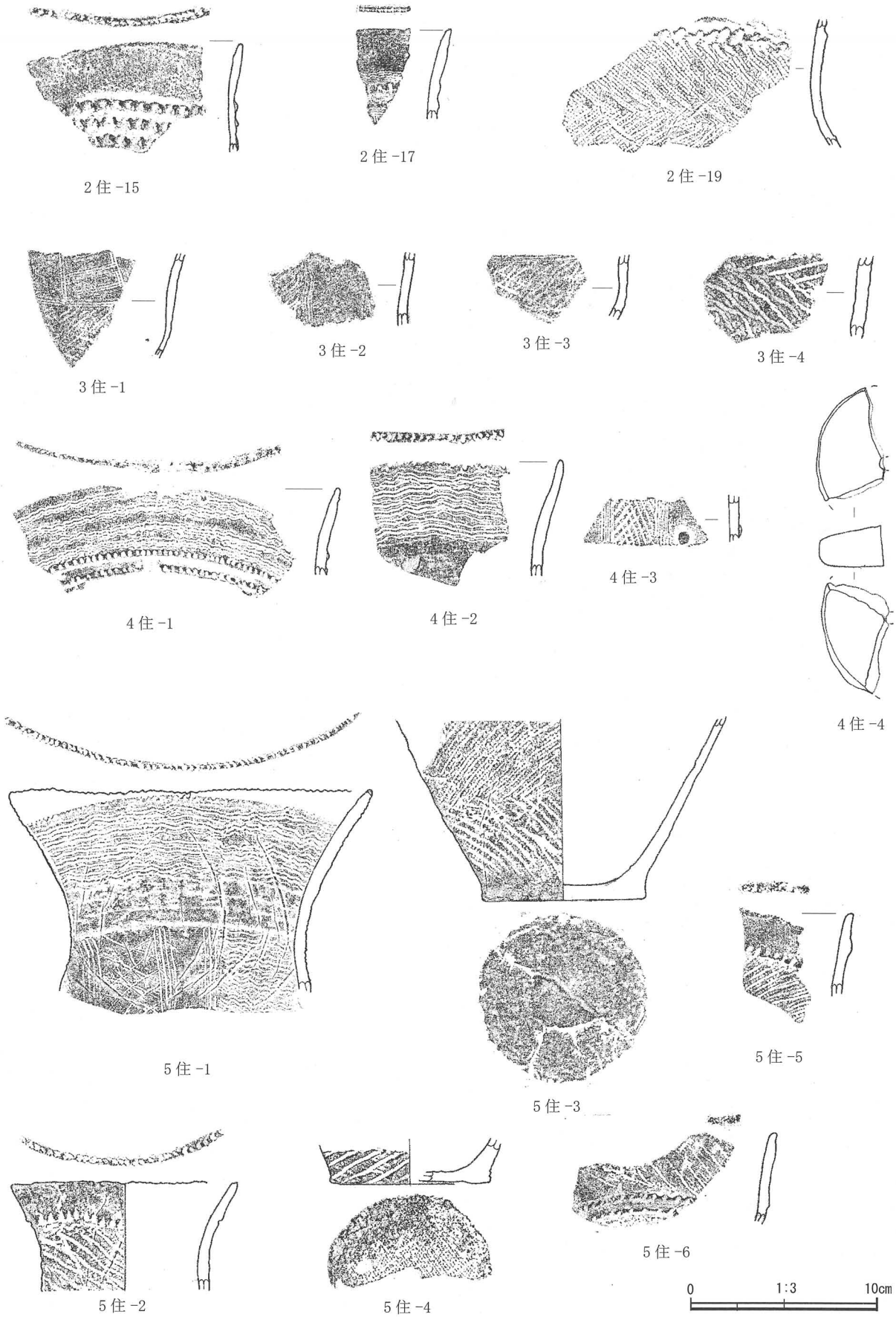
弥生時代以外の遺物としては，僅かに縄文土器片が遺構確認時に表面採取され，縄文時代前期中葉から中期前葉のものである。石鏃も1点出土しており，陥し穴と判断される3号土坑との関連が示唆されるところである。その他，長方形状を呈した土坑（4～14号土坑）からは，昭和18年発行の1銭硬貨が出土している事から，現代の所産と考えられる。



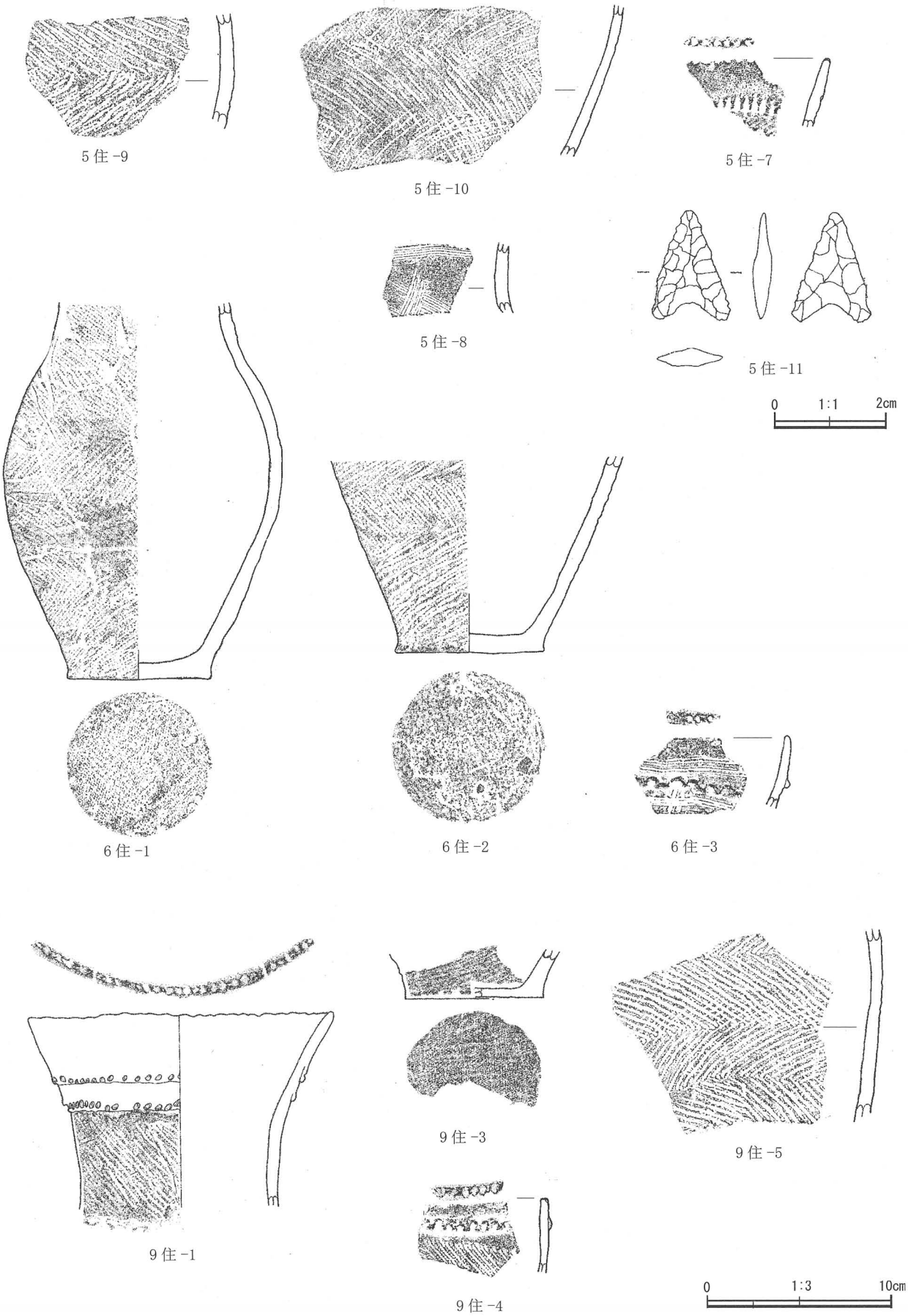
第22図　出土遺物実測図



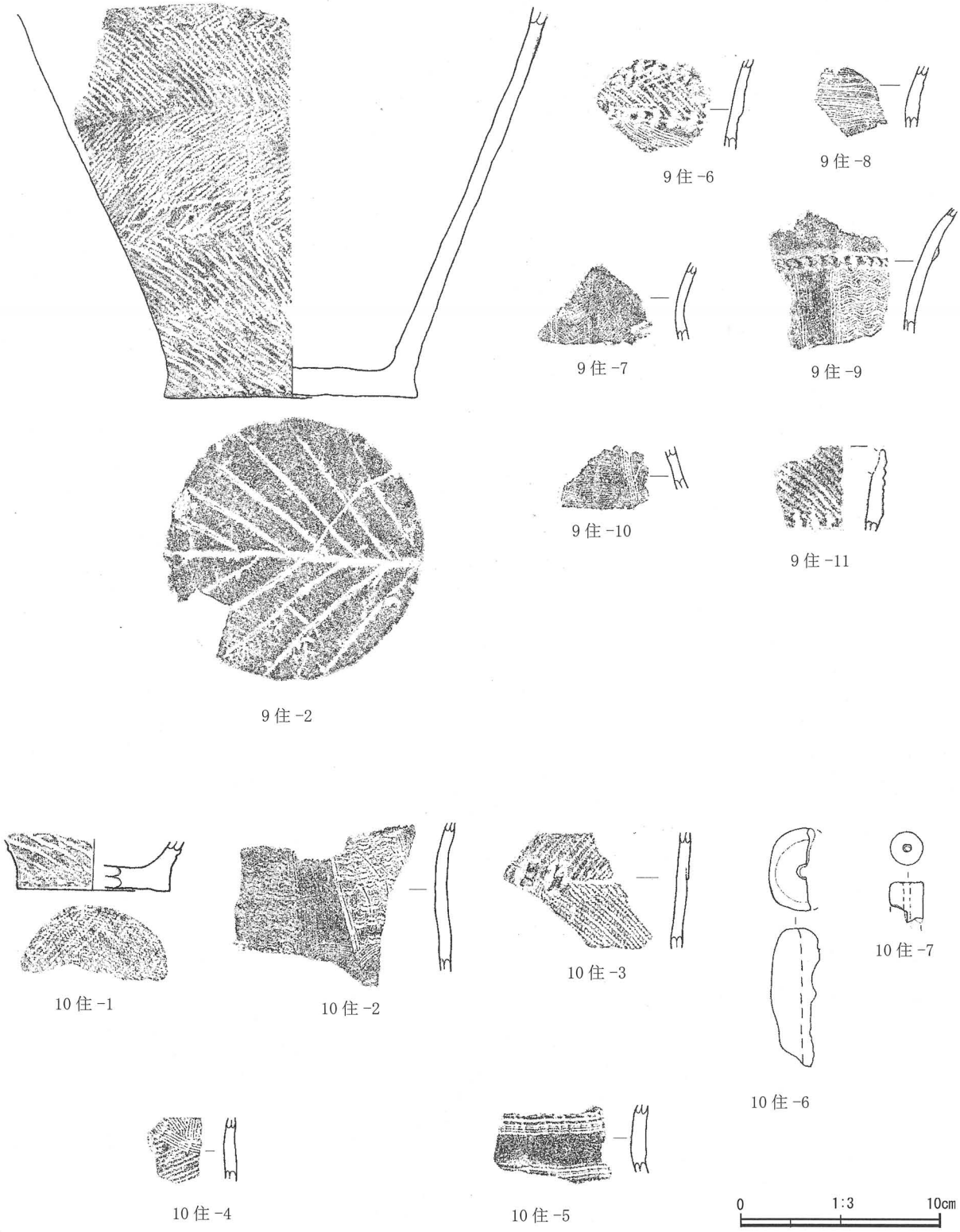
第23図　出土遺物実測図



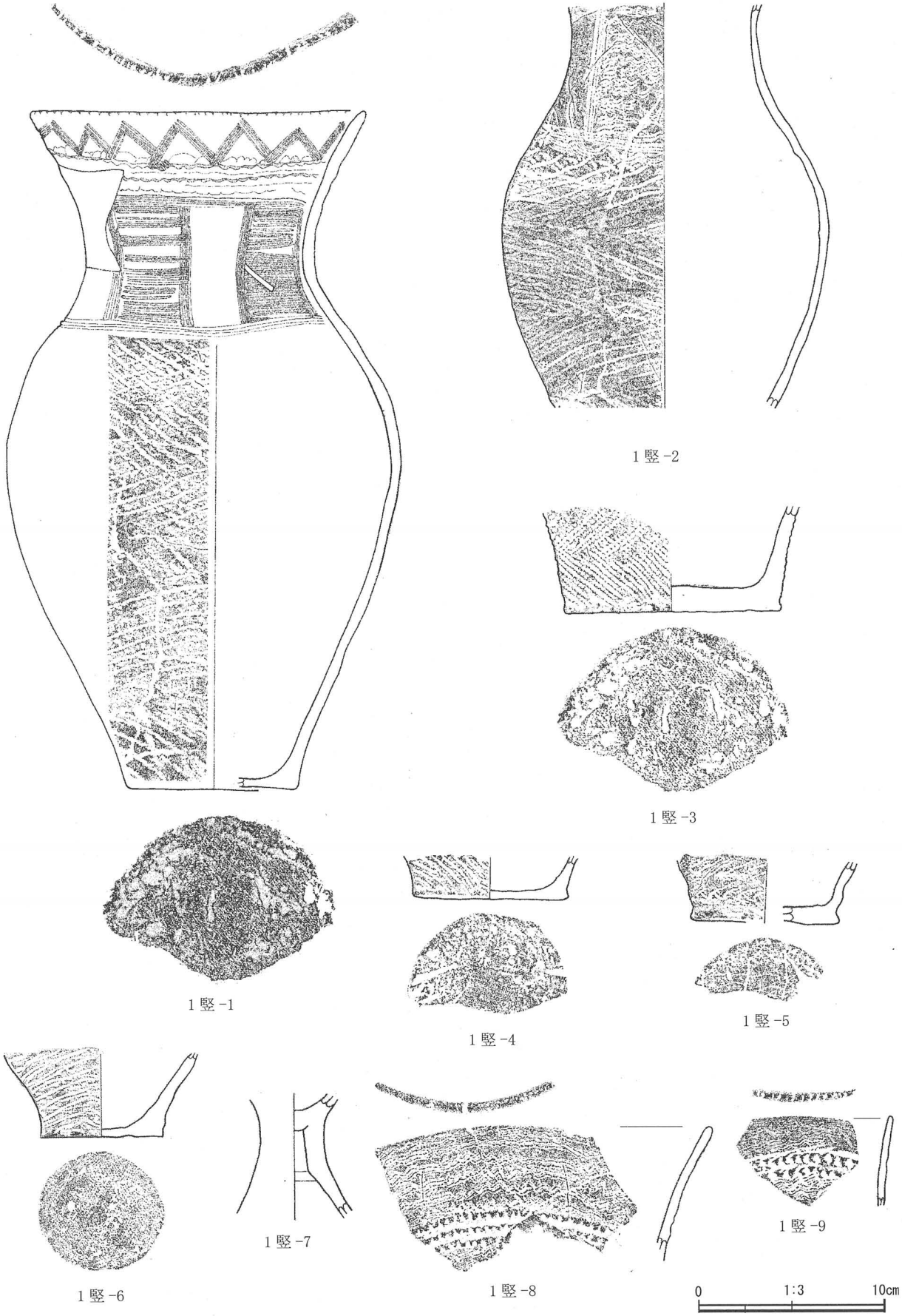
第24図　出土遺物実測図



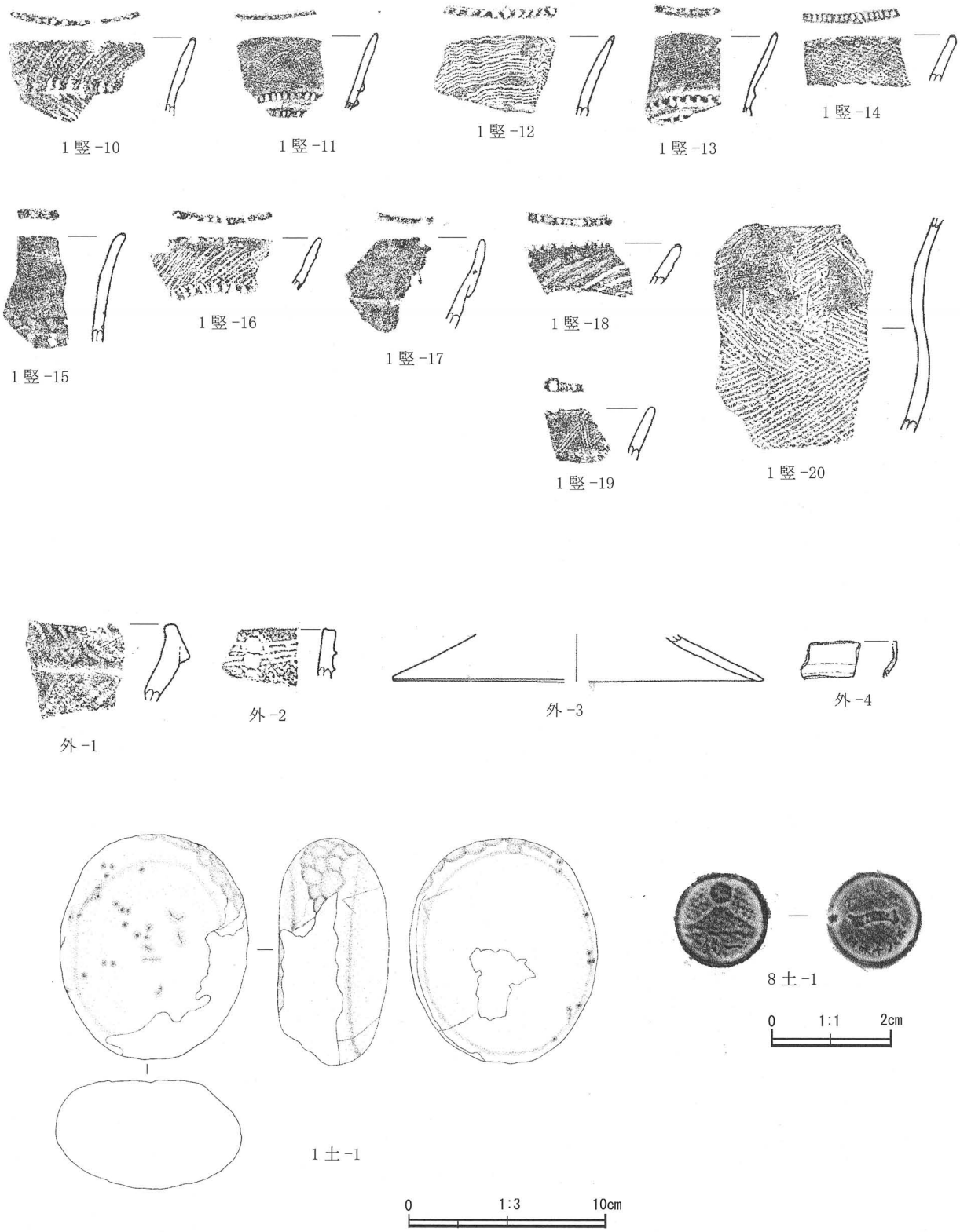
第25図　出土遺物実測図



第26図　出土遺物実測図



第27図　出土遺物実測図



第28図　出土遺物実測図

第２表　出土遺物観察表（土器）

図版番号	遺構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1住-1	SI-01	弥生土器 広口壺	〔13.3〕 30.4 7.4	口唇部は摩滅が著しい。口縁部は複合口縁で下端を縄文原体で圧痕。頸部は無文。胴部は付加条２種縄文で羽状構成をとる。底面は木葉痕。	長石・石英	普通	にぶい 赤褐色	残存率 80%
1住-2	SI-01	弥生土器 広口壺	— (3.9) (9.3)	胴部～底部片。胴部は付加条１種(付加２条)縄文が施文。底面は木葉痕。	長石・石英	普通	橙色	Pit-1 一括出土
1住-3	SI-01	弥生土器 広口壺	— (4.1) (7.4)	胴部～底部片。胴部は付加条２種(付加２条)縄文が施文。底面は木葉痕。	長石・石英・ 雲母	普通	にぶい 橙色	一括出土
1住-4	SI-01	弥生土器 広口壺	— (6.4) —	頸部片。口縁部と胴部を無文帯で区画する。口縁部・胴部ともに付加条１種が施され，口縁部側の施文に乱れが認められる。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	確認時表採
1住-5	SI-01	弥生土器 広口壺	— (3.0) —	口縁部片。口唇部は棒状工具による押圧。口辺部は無文。口縁部下端は多段になって下向きの刺突が施される。	長石・石英・ 雲母	普通	にぶい 褐色	一括出土
1住-6	SI-01	弥生土器 広口壺	— (2.5) —	口縁部片。口唇部は棒状工具による刻み。口辺部は無文。口縁部下端は縄文原体による圧痕。	長石・石英・ 雲母	普通	にぶい 褐色	一括出土
2住-1	SI-02	弥生土器 広口壺	14.3 29.8 8.0	口唇部は縄文原体の圧痕。口辺部は櫛歯状工具（4本）による山形文。口縁部と頸部は隆帯４条で区画。頸部は櫛歯状工具（4本）による縦区画スリットが６区画。区画内は波状櫛描文が密に充填される。頸部と胴部は弧状の櫛描文が横走して区画。胴部は付加条２種（付加１条）縄文で羽状構成をとる。底部は布目圧痕。	長石・石英	普通	にぶい 黄橙色	残存率 80%
2住-2	SI-02	弥生土器 広口壺	— (22.7) (7.6)	胴部～底部片。胴部は附加条２種（付加１条）縄文により羽状構成をとる。僅かに残る頸部との区画にボタン状貼付文の痕跡が認められる。底面は布目圧痕。	長石・石英	普通	にぶい 黄橙色	残存率 60%
2住-3	SI-02	弥生土器 広口壺	〔17.3〕 (21.2) —	口縁部～頸部。口縁部では，口唇部にヘラ状工具による刻み。口辺部に櫛歯状工具（5本）による波状櫛描文。頸部との区画には３条の隆帯が横走し，隆帯上は指頭による撫で付け。頸部は縦区画スリットが４区画施される。スリット内は波状櫛描文が充填。胴部は附加条２種（付加１条）が施文。	長石・石英・ 雲母	普通	にぶい 橙色	残存率 60% 02-4 が同一の胴部～底部と思われる
2住-4	SI-02	弥生土器 広口壺	— (11.8) 8.0	胴部～底部片。胴部は付加条２種(付加１条)が施文され、羽状構成をとる。底面は布目圧痕。	長石・石英・ 雲母	普通	にぶい 橙色	02-3 が同一口縁部～頸部と思われる
2住-5	SI-02	弥生土器 広口壺	— (13.5) —	頸部～胴部片。頸部は櫛歯状工具（4本）により、縦区画スリットを施す。スリット間は狭く，一部省略したりスリット上に櫛描文がはみ出たりと，雑な作りが認めれる。区画内は波状櫛歯状文が充填。胴部は附加条２種（付加１条）縄文で羽状構成をとる。胴部上半は逆方向による施文の重なりで格子状となる。	長石・石英	普通	浅黄色	残存率 20%
2住-6	SI-02	弥生土器 片口壺	— (15.2) —	頸部～胴部片。頸部は最も括れた部分が１条の隆帯で区分され，櫛歯状工具（3本）の櫛描文で頸部上半は６区画のスリット，下半は４区画のスリットが施される。スリット内は波状櫛描文が充填される。頸部と胴部は連弧文状の櫛描で区画され、胴部は附加条２種（付加１条）縄文で羽状構成となる。	長石・石英・ 雲母・ 赤色粒子	良好	橙色	残存率 50%
2住-7	SI-02	弥生土器 広口壺	(7.3) (7.3) 6.4	胴部下位～底部片。胴部は付加条２種(付加１条)縄文で、上位に行くほど雑な施文である。底面は摩滅が著しい。	長石・石英	普通	黄橙色	
2住-8	SI-02	弥生土器 広口壺	— (4.2) [8.4]	胴部下端～底部片。胴部は付加条１種（付加２条）縄文で羽状構成をとる。底面は木葉痕	長石・石英	普通	にぶい 橙色	
2住-9	SI-02	弥生土器 広口壺	— (4.7) [10.4]	胴部下端～底部片。胴部は付加条１種（付加２条）縄文で羽状構成をとる。底面は摩滅するが布目圧痕か。	長石・石英・ 赤色粒子	普通	灰黄褐色	
2住-10	SI-02	弥生土器 広口壺 (小型)	— (8.3) 4.6	壺形のミニチュア土器。口縁部欠損。頸部は無文で胴部は付加条１種（付加２条）で羽状構成をとる。	長石・石英・ 雲母	普通	橙色	残存率 80%
2住-11	SI-02	弥生土器 広口壺 (小型)	— (9.8) 6.3	壺形のミニチュア土器。口縁部欠損。頸部は櫛歯状工具（4本）による縦区画スリットが４区画施文され，区画内は同様の櫛歯状工具を用いて縦方向に連続の刺突を施す。底面は布目圧痕。	長石・石英・ 赤色粒子	普通	にぶい 黄褐色	残存率 70% 一括出土

図版番号	遺構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	焼成	色調	備考
2住-12	SI-02	弥生土器 広口壺 (小型)	— (15.0) [6.8]	壺形のミニチュア土器。口縁部及び底部欠損。頸部は縦区画スリットの櫛描文が施文され，スリット内はヘラ状工具による格子状の櫛描文。区画内は波状櫛描文が充填される。頸部の上位と下位では区分され，同様の文様体を交互に施文している。さらに頸部下位ではボタン状貼付文が等間隔で施される。胴部は付加条2種（付加1条）縄文で羽状構成をとる。	長石・石英・赤色粒子	普通	にぶい横褐色	残存率50%
2住-13	SI-02	弥生土器 広口壺	— (4.1) —	口縁部片。口唇部はヘラ状工具による刻み。口辺部は付加条2種（軸縄不明）縄文。口縁部下端は棒状工具による刻みが加えられる。	長石・石英	普通	橙色	
2住-14	SI-02	弥生土器 広口壺	— (7.2) —	口縁部片。口唇部は縄文原体圧痕。口辺部は無文の複合口縁で、口縁部下端は押圧される。頸部は付加条2種（付加1条）が雑に施文される。	長石・石英	普通	にぶい橙色	下層一括出土
2住-15	SI-02	弥生土器 広口壺	— (5.7) —	口縁部～頸部片。口唇部は縄文原体圧痕。口辺部は無文で頸部との区画に3本以上の隆帯を横走させ，隆帯上を押圧する。	長石・石英	普通	にぶい橙色	下層一括出土
2住-16	SI-02	弥生土器 広口壺	— (5.2) —	口縁部片。口唇部は縄文原体圧痕。口辺部は撚糸文が雑に施文されている。	長石・石英	普通	にぶい橙色	床着出土
2住-17	SI-02	弥生土器 広口壺	— (4.8) —	口縁部片。口唇部は細かい刻み。口辺部は無文で、頸部との区画に隆帯が施され、隆帯を挟んで櫛歯状工具（4本）による波状櫛描文が施文される。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	Pit-1 一括出土
2住-18	SI-02	弥生土器 広口壺	— (2.5) —	口縁部片。口唇部は縄文原体圧痕。口辺部は付加条2種（付加1条）に，イボ状突起が施されている。	長石・石英	普通	黒褐色	床着出土
2住-19	SI-02	弥生土器 広口壺	— (6.9) —	口縁部～頸部片。口縁部下端は隆帯上を，縄文原体による刻み。頸部は付加条1種（付加2条）縄文で羽状構成をとる。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	
3住-1	SI-03	弥生土器 広口壺	— (5.1) —	頸部片。櫛歯状工具（4～6本）に縦区画スリットが施文。スリット内は横線の櫛描文が充填される。	長石・石英	普通	にぶい黄橙色	
3住-2	SI-03	弥生土器 広口壺	— (4.0) —	頸部片。雑な縦区画スリットの櫛描文で、スリット内も波状の櫛描文が雑に充填される。	長石・石英	普通	灰黄褐色	
3住-3	SI-03	弥生土器 広口壺	— (3.6) —	胴部片。頸部は横線の櫛描文で区画。付加条2種(付加1条）縄文が施文される。	長石・石英	普通	にぶい黄橙色	pit-2 一括出土
3住-4	SI-03	弥生土器 広口壺	— (4.5) —	胴部片。撚り戻しの付加条縄文で羽状構成をとる。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	
4住-1	SI-04	弥生土器 広口壺	— (4.7) —	口縁部片。口唇部は縄文原体の圧痕。口辺部は波状櫛描文を全体に横走させる。多段の複合口縁で，下端には縄文原体圧痕による刻み。	長石・石英	普通	灰黄褐色	
4住-2	SI-04	弥生土器 広口壺	— (6.4) —	口縁部片。口唇部はヘラ状工具による刻みが施され、口辺部は櫛歯状工具（3～4本）による波状櫛描文が全体に施文される。頸部との区画は不明瞭な隆帯が横走する。	長石・石英	普通	明黄褐色	上層一括出土5住-1と接合
4住-3	SI-04	弥生土器 広口壺	— (2.1) —	頸部片。櫛歯状工具（6本）による縦区画スリットが施され、スリット内は縄文が充填され、羽状構成をとる。ボタン状貼付文が施される。	長石・石英	普通	灰黄褐色	5号住居 05-1と同上層一括出土
5住-1	SI-05	弥生土器 広口壺	19.0 (10.7) —	口縁部～頸部片。口唇部は縄文原体圧痕。口辺部は櫛歯状工具（4本）による波状櫛描文。頸部は縦区画スリットを5区画構成し，区画内の内4区画には波状櫛描文を充填，残り1単位はヘラ状工具による格子状の櫛描文を施す。格子状櫛描文が施された区画の幅は波状櫛描文が充填された区画の幅より狭い。	長石・石英・針状鉱物	普通	にぶい黄橙色	口縁部～頸部上半。 4住-3と接合
5住-2	SI-05	弥生土器 広口壺	[12.0] (5.8) —	口縁部片。口唇部は縄文原体圧痕。口辺部は無文で口縁部下端は棒状工具による刺突が施される。頸部は附加条2種（付加1条）縄文。	長石・石英・雲母	普通	褐色	
5住-3	SI-05	弥生土器 広口壺	— (9.6) 8.6	胴部下半～底部片。胴部は付加条2種（付加1条）縄文が羽状構成をとる。底面は布目圧痕。	長石・石英・赤色粒子	普通	にぶい橙色	残存率30%
5住-4	SI-05	弥生土器 広口壺	— (2.4) [8.6]	胴部下半～底部片。胴部は付加条2種（付加1条）縄文が施文される。底面は布目圧痕。	長石・石英	普通	にぶい横橙色	
5住-5	SI-05	弥生土器 広口壺	— (4.0) —	口縁部～頸部片。口唇部は摩滅のため不明瞭であるが，縄文原体の圧痕か。口辺部は無文の複合口縁で口縁部下端は縄文原体による圧痕。頸部は付加条1種（付加2条）縄文が施文。	長石・石英	普通	にぶい褐色	上層一括出土

図版番号	遺構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	焼成	色調	備考
5住-6	SI-05	弥生土器 広口壺	— (4.8) —	口縁部片。口唇部は摩滅しており不明瞭。口辺部はRの撚糸が施文。口縁部下端は多段の複合口縁で棒状工具による刻みが施される。	長石・石英	普通	明赤褐色	上層一括出土
5住-7	SI-05	弥生土器 広口壺	— (3.7) —	口縁部片。口唇部は縄文原体圧痕。口縁部は無文。口縁部下端は縄文原体の圧痕による刻み。	長石・石英	普通	にぶい 黄橙色	上層一括出土
5住-8	SI-05	弥生土器 広口壺	— (3.9) —	頸部片。櫛歯状工具（7～8本）の櫛描文が無造作に施されている。	長石・石英	普通	明黄褐色	下層一括出土
5住-9	SI-05	弥生土器 広口壺	— (6.2) —	胴部片。軸縄不明の付加条2種縄文と撚り戻しの付加条縄文が羽状に施文される。	長石・石英	良好	明赤褐色	
5住-10	SI-05	弥生土器 広口壺	— (2.1) —	胴部片。軸縄不明の付加条2種縄文が羽状に施される。	長石・石英	普通	にぶい 横橙色	
6住-1	SI-06	弥生土器 広口壺	— (20.2) 7.6	胴部は付加条2種（付加1条）縄文を施し，羽状構成をとる。底面は布目圧痕。	長石・石英	普通	にぶい 横褐色	
6住-2	SI-06	弥生土器 広口壺	— (10.5) 8.0	胴部～底部片。胴部は付加条1種（付加2条）縄文と撚り戻し付加条縄文が羽状に施文されている。底面は摩滅が著しい。	長石・石英・雲母	良好	にぶい 黄橙色	
6住-3	SI-06	弥生土器 広口壺	— (4.0) —	口縁部。口唇部は棒状工具による刻み。口辺部下端の隆帯上には棒状工具による刺突。口縁部から頸部は櫛描文が無造作に施文。	長石・石英	普通	にぶい 橙色	床着出土
9住-1	SI-09	弥生土器 広口壺	16.4 (10.5) —	口縁部～頸部片。口唇部は縄文施文。口辺部は無文の複合口縁で，複合部が二段にわたり，刺突文が施されている。頸部は付加条1種（付加2条）が施文される。	長石・石英・雲母	良好	にぶい 黄褐色	
9住-2	SI-09	弥生土器 広口壺	— (19.1) 12.9	胴部～底部片。胴部は付加条1種縄文（付加2条）により羽状構成をとるが，中段に撚りの異なる原体が用いられている。底面は木葉痕。	長石・石英・雲母	普通	にぶい 黄橙色	
9住-3	SI-09	弥生土器 広口壺	— (12.5) 7.4	胴部～底部片。胴部は付加条1種縄文（付加2条）。底面は布目圧痕。	長石・石英・雲母	普通	にぶい 黄褐色	一括出土
9住-4	SI-09	弥生土器 広口壺	— (4.0) —	口縁部片。口唇部は縄文原体圧痕。口辺部は無文の複合口縁で，口縁下端は縄文原体による刻み。	長石・石英	普通	灰褐色	一括出土
9住-5	SI-09	弥生土器 広口壺	— (10.4) —	胴部片。付加条1種（付加2条）縄文と撚り戻しによる縄文が羽状に施文される。	長石・石英	普通	にぶい 橙色	
9住-6	SI-09	弥生土器 広口壺	— (4.1) —	口縁部片。口辺部は、付加条1種（付加2条）縄文。口縁部下端は縄文原体による刺突。	長石・石英	普通	黒褐色	確認時表採
9住-7	SI-09	弥生土器 広口壺	— (4.5) —	口縁部片。口辺部は付加条1種（付加2条）が羽状に施文。口縁部下端は棒状工具による刻み。頸部は櫛描文が斜方向に施文される。	長石・石英	普通	にぶい 褐色	頸部は9住-9と同一 一括出土
9住-8	SI-09	弥生土器 広口壺	— (3.6) —	頸部片。綾杉状櫛描文が充填されている。	長石・石英	普通	黄褐色	
9住-9	SI-09	弥生土器 広口壺	— (3.1) —	頸部片。櫛描文が斜方向に施文される。	長石・石英	普通	暗赤褐色	頸部は9住-7と同一
9住-10	SI-09	弥生土器 広口壺	— (6.1) —	口縁部～頸部片。口辺部は無文。口縁部と頸部は隆帯によって区画され，隆帯上には縄文が施文されている。頸部は櫛歯状工具（4本）による縦区画スリット。区画内は波状櫛描文が充填される。	長石・石英・赤色粒子	普通	にぶい 褐色	確認時表採
9住-11	SI-09	弥生土器 広口壺	— (2.0) —	頸部片。縦区画スリット内に横線櫛描文が充填される。	長石・石英	普通	にぶい 赤褐色	確認時表採
10住-1	SI-10	弥生土器 広口壺	— (2.5) [7.5]	胴部下半～底部片。胴部は付加条2種（付加1条）縄文が施文。底面は布目圧痕。	長石・石英・雲母	普通	にぶい 横橙色	2層一括出土
10住-2	SI-10	弥生土器 広口壺	— (7.4) —	頸部片。櫛歯状工具（3～5本）による縦区画スリット。区画内は波状櫛描文が充填。頸部下端には下向きの連弧文が施文される。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土

図版番号	遺構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	焼成	色調	備考
10住-3	SI-10	弥生土器 広口壺	— (5.7) —	口縁部片。複合口縁で，口縁部下端にはイボ状突起が施される。口辺部は付加条2種（付加1条）縄文，頸部文様体はRL単節縄文が施文される。	長石・石英	普通	にぶい橙色	2層一括出土
10住-4	SI-10	弥生土器 広口壺	— (3.3) —	頸部～胴部片。櫛歯状工具（5本）により，櫛描文が施され，下半は付加条1種（付加2条）が施文される。	長石・石英	普通	明褐色	2層一括出土
10住-5	SI-10	弥生土器 広口壺	— (3.4) —	頸部片。櫛歯状工具（5本）による2条の簾状文が横走する。簾状文内は無文。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	2層一括出土
1竪-1	SI-11	弥生土器 広口壺	17.6 36.1 9.0	口唇部はヘラ状工具による刻み。口辺部から頸部にかけては櫛歯状工具（3本）による櫛描文で，口縁部に山形文，頸部は縦区画スリットが5区画で区画内は横線文が充填。頸部と胴部の区画には櫛描文を横走させる。胴部は付加条2種（付加1条）を施文。胴部上位は逆方向にも施文が加えられ格子状となる。	石英・雲母	普通	にぶい橙色	残存率60～70%
1竪-2	SI-11	弥生土器 広口壺	— (22.0) —	頸部～胴部片。頸部は櫛歯状工具（4本）により縦区画スリット。区画内は波状櫛描文が充填。頸部と胴部の区画は連弧文が施される。胴部は軸縄不明の付加条縄文が施文され，羽状構成をとる。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙色	残存率40%
1竪-3	SI-11	弥生土器 広口壺	— (5.5) [11.6]	胴部～底部片。胴部は単節RL縄文が羽状に施文される。底面は布目圧痕。	長石・石英	普通	明横褐色	
1竪-4	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.3) [8.2]	胴部～底部片。胴部は付加条1種（付加2条）縄文。底面は布目圧痕。	長石・石英	普通	にぶい橙色	
1竪-5	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.3) [8.0]	胴部～底部片。胴部は付加条2種（付加1条）縄文が施文。底面は木葉痕。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙色	
1竪-6	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.4) 6.5	胴部～底部片。胴部は付加条2種（付加1条）縄文が施文。底面は布目圧痕。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄褐色	一括出土
1竪-7	SI-11	弥生土器 広口壺	— (6.7) —	脚部片。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙色	
1竪-8	SI-11	弥生土器 広口壺	— (7.1) —	口縁部片。口唇部は不明瞭。口縁部は波状櫛描文が密に施文。口縁部下端は3条の隆帯が横走し，隆帯上はヘラ状工具による刻みが施される。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	上層一括出土
1竪-9	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.8) —	口縁部片。口唇部はヘラ状工具による刻み。口縁部下端は2条の隆帯が施され，縄文原体で押圧される。口縁部と頸部文様体は波状櫛描文が密に施文される。	長石・石英	普通	浅黄色	上層一括出土
1竪-10	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.9) —	口縁部片。口唇部は縄文原体圧痕。口縁部は複合口縁で付加条1種縄文（付加2条）が施文され，口縁部下端は縄文原体圧痕が施される。	長石・石英・雲母	普通	暗褐色	2層一括出土
1竪-11	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.9) —	口縁部片。口唇部は不明瞭。口縁部は複合口縁で波状櫛描文が施文。口縁部下端は多段にわたり，棒状工具による刻みが施される。	長石・石英	普通	橙色	2層一括出土
1竪-12	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.1) —	口縁部片。口唇部は縄文が施文される。口縁部には5～6本単位の波状櫛描文が雑に施文される。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙色	上層一括出土
1竪-13	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.2) —	口縁部片。口唇部は縄文が施され、口縁部は無文。口縁部下端は縄文原体の刺突。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙色	2層一括出土
1竪-14	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.3) —	口縁部片。口唇部は棒状工具による刻み。口辺部は付加条縄文が格子状に施文される。。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐色	上層一括出土
1竪-15	SI-11	弥生土器 広口壺	— (5.4) —	口縁部片。口唇部は不明瞭ではあるが、縄文が施文か。口縁部は無文。口縁部下端は縄文原体よる刺突。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	上層一括出土
1竪-16	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.1) —	口縁部片。口唇部は縄文施文。口縁部は付加条1種(付加2条）で下端は縄文原体の圧痕。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	上層一括出土
1竪-17	SI-11	弥生土器 片口壺	— (4.4) —	口縁部片。折り返し口縁。	長石・石英	普通	にぶい褐色	上層一括出土

図版番号	遺構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1竪-18	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.1) —	口縁部片。口唇部は刻み。口縁部は付加条2種（付加1条）縄文。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土
1竪-19	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.7) —	口縁部片。口唇部は細かい刻み。口辺部は櫛歯状工具（3本）による櫛描文が山形状に施文される。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土
1竪-20	SI-11	弥生土器 広口壺	— (10.8) —	頸部～胴部片。頸部は付加条1種（付加2条）縄文が縦方向に施文され，無文体と交互に配される。胴部は付加条1種（付加2条）縄文による羽状構成をとる。	長石・石英	普通	明赤褐色	
外-1	遺構外	縄文土器 深鉢	— (4.0) —	口縁部片。口縁端部は複合化しRL単節縄文、口縁部下は単節LR縄文を施文する。内面には稜が認められる。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	縄文中期前葉
外-2	遺構外	縄文土器 深鉢	— (2.6) —	口唇部は面取り。口縁部は半截竹管による沈線が横走し、円形状の刺突文が垂下する。	長石・石英・繊維	普通	明褐色	縄文前期中葉
外-3	遺構外	土師器 高坏カ	— (2.3) [18.6]	高坏脚部裾部分。	長石・石英	良好	にぶい 黄橙色	SI-01 周辺採取
外-4	遺構外	土師器 受口カ	— (1.8) —	口縁部片。内外面ナデ調整。	長石・石英	普通	浅黄色	SI-01 周辺採取

第3表　出土遺物観察表（土・石製品）

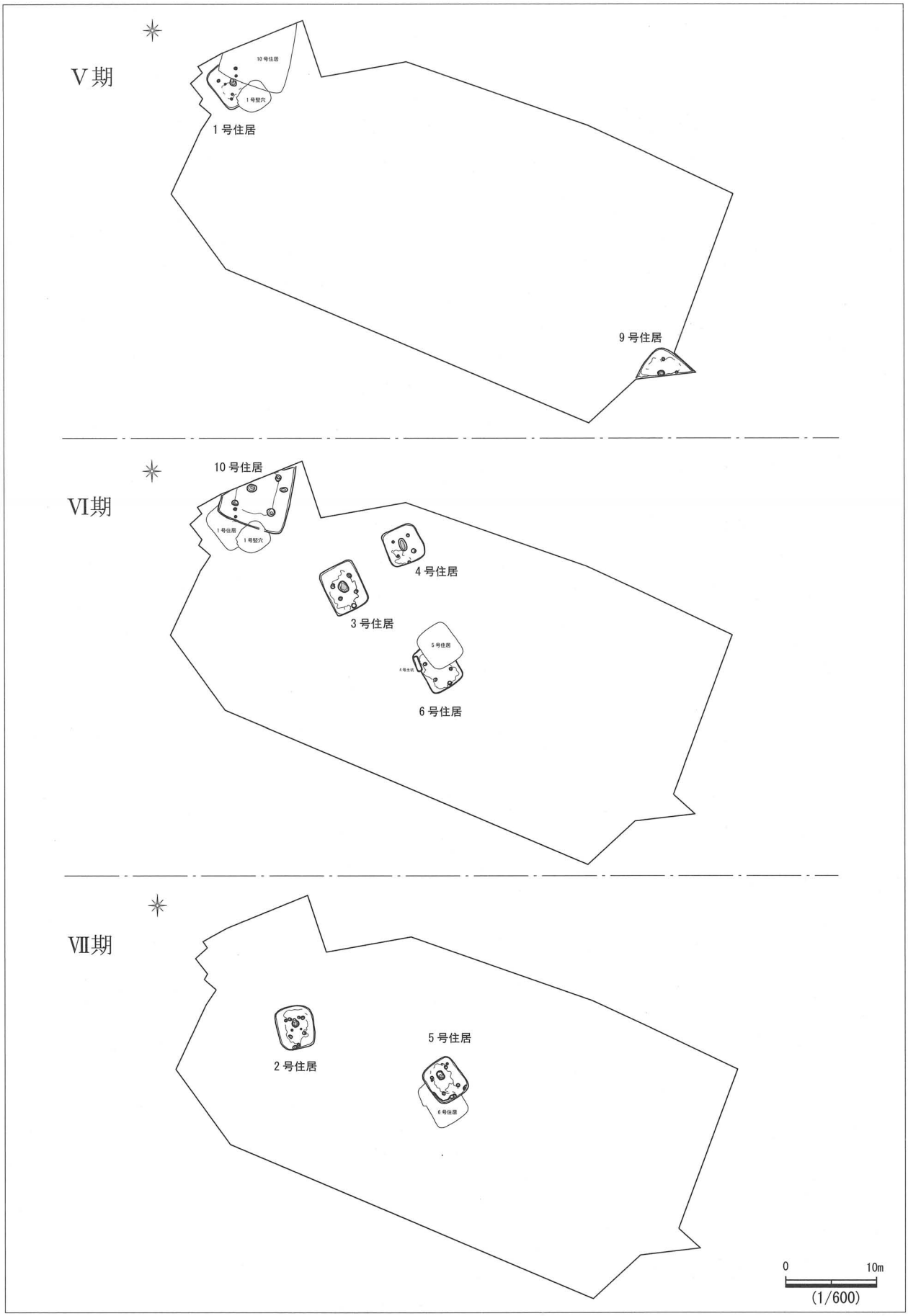
図版番号	遺構	種別・器種	径	長さ (幅)	口径	厚さ	胎土（材質）	焼成	色調	備考
4住-4	04-4	土製品・紡錘車	〔5.3〕	—	〔0.5〕	1.5	長石・石英	良好	にぶい黄褐色	覆土中より出土
10住-6	10-6	土製品・環状土錘	2.8	4.6	0.6	—	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄褐色	覆土中より出土
10住-7	10-7	石製品・管玉	1.2	(1.4)	0.3	—	凝灰岩	—	—	覆土中より出土

第4表　出土遺物観察表（石器）

図版番号	遺構	種別・器種	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	材質	備考
5住-11	05-11	石器・石鏃	2.0	1.5	0.3	844	チャート	
5土-1	SK-1	石器・敲き石	11.3	9.5	5.6	0.6	安山岩	

第5表　出土遺物観察表（金属製品）

図版番号	遺構	種別・器種	径	孔幅	重さ (g)	初鋳年	材質	備考
8土-1	SK-8	一銭硬貨	1.6	—	0.6	1943年	アルミ	



第29図　塙谷遺跡集落変遷図

第Ⅴ章　総括

今回の調査は，弥生時代後期後半の十王台期にあたる集落の調査となった。住居跡10軒という限られた軒数の調査ではあったが，出土遺物などからさほど時期差を持たない集落であったことが理解された。ここでは，涸沼前川流域の現在までに得られている弥生時代後期後半における集落の成果を基に，塙谷遺跡で確認された住居跡の形態の違いと重複関係を併せて注目してみた場合，住居間の時期差をある程度検討する事が可能ではないかと考えられる。

そこで，まず住居形態や規模の差から分類をした上で，出土遺物の様相を加味し，十王台式集落の変遷を検討してみたい。

第1節　住居形態と規模の差異について

今回の調査では，弥生時代後期の住居跡が10軒と住居に関連すると思われる竪穴遺構が1基確認されている。重複するのは1号住居と10号住居，5号住居と6号住居である。これらはいずれも弥生時代後期に比定される住居同士の重複となっている。それ以外の6軒は，各々単独で確認され，削平のため覆土が飛ばされてしまった7・8号住居，遺構の半分が撹乱を受けている9号住居を除いて，遺構の形態はある程度明瞭である。

確認された住居の軒数としてはさほど多くはなく，明瞭に確認された住居はさらに限られるが，各住居の規模や形態，ピット等の内部施設の性格はほぼ均一の状況が窺える。その状況を細分する形で見てゆくと，若干の形態や規模，特徴の差をまとめて大まかに分類する事ができる[1]。

平面形状については，隅丸方形を呈するもの（4号・10号住居）と，隅丸長方形を呈するもの（1号・2号・3号・5号・6号住居）とに分類される。住居の面積規模について，隅丸方形の住居では，50㎡を超える大型のもの（10号住居）と，20㎡以下のもの（4号住居）までばらつきがある。隅丸長方形の住居では，20～23㎡の範疇に入るもの（1号・3号・6号住居）と，20㎡以下のもの（2号・5号住居）が存在し，さらにそれらの中で規模を比較してみると，20～23㎡面積規模を有する住居の長軸と短軸の比率は1：1.2を超え，20㎡以下の面積規模を有する住居は1：1.2に達しておらず，やや方形に近い形状となっている。

以上の事から，今回の調査区で確認された遺構の形態分類をまとめてみると以下のようなる[2]。

Ⅰ類　大型の隅丸方形を呈し、面積規模が30㎡以上である住居（10号）
Ⅱ類　小型で隅丸方形を呈し、面積規模が20㎡以下である住居（4号）
Ⅲ類　中型で隅丸長方形を呈し、面積規模が20～23㎡である住居（1号・3号・6号）
Ⅳ類　小型で隅丸長方形を呈し、面積規模が20㎡以下である住居（2号・5号）

これらの分類をもとに，周辺遺跡との比較をしてみたい。

まず小原周辺での調査事例を上記項目に当てはめてみる。谷津を挟んで対峙する丘陵地に立地した小原遺跡の2期にわたる調査で確認された3軒の弥生住居の内，いずれもⅣ類に相当するようであるが，確認された遺跡の範囲が限られていることもあり，今後の成果によっては傾向に差が出てくるものと思われる。さらに小原遺跡より南方，涸沼前川に面した丘陵地に立地する三本松遺跡では15軒の弥生住居が調査されている。その成果によると，規模の不明確な3軒を除いた12軒は，ほとんどが隅丸長方形又は長方形のものとなり，Ⅲ・Ⅳ類に相当するものは僅か2軒となっている。他の住居は，中型であっても長軸が5.5mを超えて24～30㎡の面積規模になるものが6軒，30㎡以上の大型のものが4軒あり，塙谷遺跡とは若干異なった様相が窺える。

次に，小原周辺から涸沼前川流域を下った茨城町・大戸遺跡群での調査事例と比較してみる。涸沼前川左岸に立地する矢倉遺跡では，確認された弥生住居は31軒，その内形状が不明確なものを除いた25軒では，Ⅰ類2軒，Ⅱ類5軒，Ⅲ類5軒、Ⅳ類4軒，これらに属さない中型から大型のものが5軒と，それぞれの類型がほぼ均一に確認され，全体では規模の小さいものが主体のようである。矢倉遺跡対岸の右岸に立地する大畑遺跡では，弥生住居10軒の内，Ⅲ類が2軒，Ⅳ類が1軒に留まり，当てはまらない中型から大型のものが7割を占めている。特に大型の40㎡を超える大型の住居が2軒確認されており，全体を見ても規模の大きいものが目立ち，矢倉遺跡とは違った様相を見

せている。塙谷遺跡は全体的に規模の小さい住居が主体となっており，その観点から見れば矢倉遺跡に近いと考えられる。

これらの規模の分類から，さらに内部施設との関係について見てみる。

炉の位置は，住居面積規模の差異に比例して配置に規則性が窺える。比較できるものとして隅丸長方形の住居に着目すると，Ⅲ類の炉は住居のほぼ中央もしくは若干北寄りに位置するが，Ⅳ類になると，北側の主柱穴間に近い位置にまで移動してくる状況である。さらに貯蔵穴と思われる掘り込みが2号・3号・5号住居で確認されており，これを炉と同様に隅丸長方形の住居の分類に照らし合わせると，Ⅲ類では出入り口施設と思われるピットの西側にやや離れて配置されるが，Ⅳ類では出入り口ピットに接している事が見て取れ，炉の配置と併せて見てゆくと非常に興味深い。（第29図参照）

以上の事から，若干ではあるが住居規模の差異と住居内施設の配置が相互に関係していることが考えられる。但し，これらは現段階で得られている資料の比較であって，他遺跡との比較には住居数の差異による違いがあるかもしれない事を念頭におかなければならず，今後の塙谷遺跡の成果が期待される。

その他には，今回調査された住居の中で特異な例が2つあげられる。

一つは，6号住居の出入り口に伴うと予想されるピットの存在で，床の硬化部分がピット上面の半分程度まで及んでいたことである。それぞれの住居では同じように南壁側中央に出入り口に伴うと予想されるピットが存在するわけであるが，6号住居の硬化部分をたち割って確認したところ，硬化下は締りの弱い土層が堆積していることが確認されている。これらの状況から，出入りの繰り返しによって硬化したものと予想される。もう一つは、1号住居及び2号住居に見られる4本主柱穴間内の小ピットである。1号住居では，重複していることもあって南東側の主柱穴及びこの小ピットは認められなかったが，存在したことはほぼ間違いないと思われる。1号住居の小ピットは，主柱穴のほぼ対角線上に位置している。一方，2号住居の小ピットは北側に寄っており，北側のピットは主柱穴内より若干はみ出している。この2号住居のピットの配列を見た場合，特に主柱穴を意識して補助的な柱を配したものとは考えにくく，P-8では僅かに床面の硬化した部分が被っていたことから考えても，拡張を伴う以前の主柱穴であった可能性を視野に入れておかなければならないと思われる。

これら特異な項目については，先に述べた住居規模の分類との関係を見出すことはできなかった。今後の塙谷遺跡における類例を待ちたい。

第2節　塙谷遺跡の出土遺物について

それぞれの住居跡から出土した弥生土器は，広口壺の破片が主体となって出土している。形式は，十王台式土器が主流であり，県内で検討されている編年[3]に当てはめてみた場合，概ねⅤ期（十王台1a式・長峰〈新〉式）からⅦ期（十王台式紅葉段階）の範疇に収まるものと考えられる。出土遺物の中には，十王台式土器の他に二軒屋式系や樽式系，上稲吉式系といった異系統の土器も含まれている。それら異系統土器の施文手法が十王台式系の土器に混在する様相も見受けられ，これらの事を念頭に置きながら各住居における出土遺物の様相を概観してゆきたい。

1号住居では，縦区画スリットを有する十王台式の特徴を持った土器片は少ない。図示しなかったものの中には，付加条1種縄文に木葉痕を有する底部片も出土し，二軒屋系の遺物も見受けられる。主になる遺物としては1住-1があり，口辺部の幅が狭く頸部が無文となっているもので，同様の破片も覆土中より出土している様相から見て，十王台1a式に並行する長峯（新）式の住居と思われる。

2号住居では，広口壺のほかに片口壺や小型土器が出土しており，調査区の中では遺物の出土量や器種が多い住居となっている。2住-3は幅広の口縁部に縦区画スリット，スリット内には波状櫛描文が充填される文様構成で，口縁部下端の隆帯が撫で付けられている。また2住-5は頸部から胴部のみのものであるが、スリットの幅が狭くなり，その単位の中には縦区画の櫛描文が省略されている退化傾向も認められる。以上の様相からⅦ期に相当するものと考えられる。その一方で2住－1のように口縁部の幅が狭く隆帯が明瞭なもので，Ⅵ期に相当すると思われる一段階古い遺物も出土している。双方で時期の食い違いが認められるが，床面直上から出土するⅦ期の遺物が住居に伴う遺物として採用されるものと思われる。また2号住居では，胴部に連弧文が施される久慈川系と思われる2住-6、頸部が無文の霞ヶ浦周辺様相を持つ2住-10などが注目される。

3号住居では，出土遺物が小破片主体となるため，全容を把握しにくい状況であるが，縦区画スリットの手法や縄文原体の様相から，十王台1式の範疇に収まるものと思われる。

4号住居では，3号住居同様，小破片が主体となっており，図示した遺物は僅かである。4住-1はやや幅広の口辺部に波状櫛描文を施文しているが，口縁部下端は多段の隆帯に縄文を押圧した刻みが施されているもので，十王台式でもやや古手になると思われる。4住-2は5住-1と接合する口縁部片であるが，関連については不明である。また，スリット区画内に羽状構成の縄文を施している特異な頸部片4住-3も出土している。

5号住居では，形状を留めた遺物として5住-1の広口壺が出土しており，口縁部幅が広めである事や隆帯が撫でつけられて薄い状態である事などより，十王台式紅葉段階に相当するものと考えられる。一方、5住-3は，口縁部の幅が狭い上に口縁部下端を刺突する手法などから，形態的にも5住-1とは時期を異にした古い段階の口縁部片である。同住居から出土している他の遺物を見ても，新しい様相のものと古い様相のものが混在する状況にある。

6号住居では，6住-1の壺形土器のように付加条1種（付加2条）縄文を施文したものや，6住-3の櫛描文の特徴など図示できたものは僅かながら，全体の破片から異系統主体の様相を呈している。

7・8号住居では，いずれも覆土が削平を受けており，炉及び主柱穴の確認に留まっている事から時期を判断する資料は得られていない。

9号住居では，土器口縁部が無文の二段の複合口縁で，各段に円形の刺突文が施され，頸部は付加条1種（付加2条）縄文が施文されている9住-1，大型の壺形土器で底面を木葉痕が施された9住-2があり，これらはいずれも文様帯に付加条1種（付加2条）縄文が施文されている。また9住-6・7・10の頸部に認められる櫛歯の様相から，二軒屋系統色の濃い住居となっている。時期的には，9住-1の遺物で頸部下半に無文帯を持つ手法などは，十王台式に縦区画が採用されない段階のものと考えられ，1号住居と同様に十王台1a式並行の長峯（新）式の様相が窺われる。また出土遺物の中には，口縁部と頸部の区画として1条の隆帯上に縄文を施文する特異なもの9住-9も見受けられる。

10号住居では，住居の規模に対して出土遺物の多くが小破片となっている。ほとんどが1～2層での出土となっており，その中で土器5点を抽出している。十王台式の文様構成をとるものの中には，頸部と胴部の区画に連弧文を施す10住-2があり，久慈川流域の影響が認められる。また、櫛描文の特徴を踏まえて見てゆくと，10住-3～5で北関東の二軒屋系や樽式系の遺物も含まれているようである。土器の他に，紡錘車や環状土錘などの土製品が唯一出土している住居である。

住居ではないが，今回調査された遺構の中で最も多くの遺物が出土した1号竪穴では，十王台式が主流となっている。口縁部の文様帯には多種多様なものが出土しており，若干の二軒屋系が混在する。胴部の文様帯には付加条2種（付加1条），底部は布目痕が主体である。1竪-1・2は文様構成から2住-1に通じるものである。二軒屋系のものとしては1竪-20があり，胴部は付加条1種（付加2条）縄文で羽状構成をとり，縦方向に付加条1種縄文を施文している。また、器種の中には，1竪-7の高坏片や1竪-17に片口壺の口縁部片が出土している。

第3節　塙谷遺跡における集落の変遷について

ここでは，住居間の切り合いによって新旧関係が明瞭な住居，1号住居と10号住居，5号住居と6号住居の出土遺物から，他の住居の出土遺物と比較し，さらには先に検討した住居形態と絡めて塙谷遺跡における集落の変遷を窺ってみたい。

1号住居と10号住居は，1号竪穴とともに重複し合っている。土層堆積状況と床面の遺存状況から，1号住居が最も古く，次いで1号竪穴，10号住居の順で構築されていた事が判明している。出土遺物からも，1号住居の様相は十王台1a式の時期と考えられている。それに対し10号住居は，図示した10住-2の土器片や，図示しなかった十王台式に伴う土器片の様相から，十王台1式の範疇に収まるものと思われ，時期差をほとんど持たないものと考えられる。1号竪穴については，覆土中の廃棄遺物である可能性があるものの，1竪-1の様相が十王台1b式のものと考えられる。以上の事から重複関係は，1号住居→1号竪穴→10号住居の変遷が読み取れ，Ⅴ～Ⅵ期の時期に相当するものと思われる。

次に，5号住居と6号住居であるが，遺構確認及び土層の状況から6号住居が5号住居によって壊されている事が明らかとなっている。5号住居より古い6号住居では，6住-1の壺形土器のように付加条1種（付加2条）縄文を施文したものや，6住-3の櫛描文の特徴など図示できたものは僅かであるが，異系統主体の土器が主流で出土

している。一方5号住居では，遺物の項で述べたように，新しい土器と古い土器が混在して出土している。但し，遺物の出土地点・出土状況などから，5住-1の広口壺が遺構の時期に採用されるものと考えられ，十王台式紅葉段階のⅦ期に相当する住居であると思われる。同じ住居から出土した古い段階の土器5住-3は，口縁部の形態や手法から時期的に十王台1a式並行の所産と思われる。この遺物は，同一のものが一括遺物の中からも出土しており，出土地点も住居下位の出土ではあるものの，土層の堆積状況から重複する6号住居からの埋没過程での流れ込みの可能性が高いものと考えられる。

重複を免れた住居を見てゆくと，2号住居は出土遺物や遺構形態から5号住居に類似性を認める事ができる。出土遺物を比較した場合，2住-5のように退化傾向が窺える事から，5号住居よりは若干新しい可能性もある。4号住居は，調査区内では唯一隅丸方形を呈する住居で，出土遺物は全体的に古手の様相である。その中で4住-2の口縁部片は，5住-1と接合するが，4号住居と5号住居は住居形態からも出土遺物からも関連性は不明である。9号住居は9住-1の遺物から1号住居に類似性が認められ，全体的に二軒屋系の様相を持つ点でも同時期に営まれた可能性がある。

ここで注目されるのが，各住居跡から異系統の土器，取り分け今回の調査区では二軒屋系の遺物が比較的多く出土している事である。付加条1種（付加2条）縄文が施文されるものが多く，底部では木葉痕が施された底部片が半数近く確認されている。いずれも二軒屋式Ⅲ期[4]のものが主流であると考えられる。二軒屋系が含まれる要素についての検討は，茨城町大戸遺跡群の調査において試みられている[5]が，ここでは塙谷遺跡全体での成果，傾向だけに留めておく。

最後に，住居形態をこれまでの出土遺物による住居変遷に合わせて見てゆくと，ここでも一定の規則性が当てはめられる。Ⅴ～Ⅵ期に属すると思われる住居（1・4・6・[9]・10号住居）は，先に第1節で検討したⅢ類に相当し、炉は住居のほぼ中央もしくは若干北寄りに位置し，貯蔵穴は出入り口ピットから若干離れている。Ⅶ期に属すると思われる住居（2・5号住居）はⅣ類に相当し，炉は北側主柱穴間に寄って構築され，貯蔵穴は出入り口ピットに接している。これらの規則性を，小原地区の調査事例や，茨城町大戸遺跡群での調査事例に当てはめてみると，同様の状況を垣間見ることができる。

以上の状況を踏まえた上で，今回の調査された各住居の変遷を，前述した遺構形態と出土遺物から追ってゆくと，弥生後期後半のⅤ期の段階で1号住居や9号住居が出現し，Ⅴ～Ⅵ期の間に6号住居，或いは4号住居が後続してゆく。さらにⅦ期になって2号住居と5号住居が営まれていったものと考えられる。

今回の調査では，弥生時代後期後半のみの集落として調査を行ったわけであるが，既に調査が行われている小原地区の周辺遺跡では，弥生時代から古墳時代，奈良・平安時代の住居を伴う複合遺跡が調査されている。今回調査が行われた地点は，遺跡として括られた範囲の南端部にあたり，小支谷沿いの丘陵地最先端部のほんの一部であるが，周辺遺跡の様相から見ても塙谷遺跡が一時代に留まった集落とは考えられず，全体像については今後行われる調査の成果を待たなければならないと考える。小原地区における弥生時代後期集落の位置づけはその後となる。

脚注

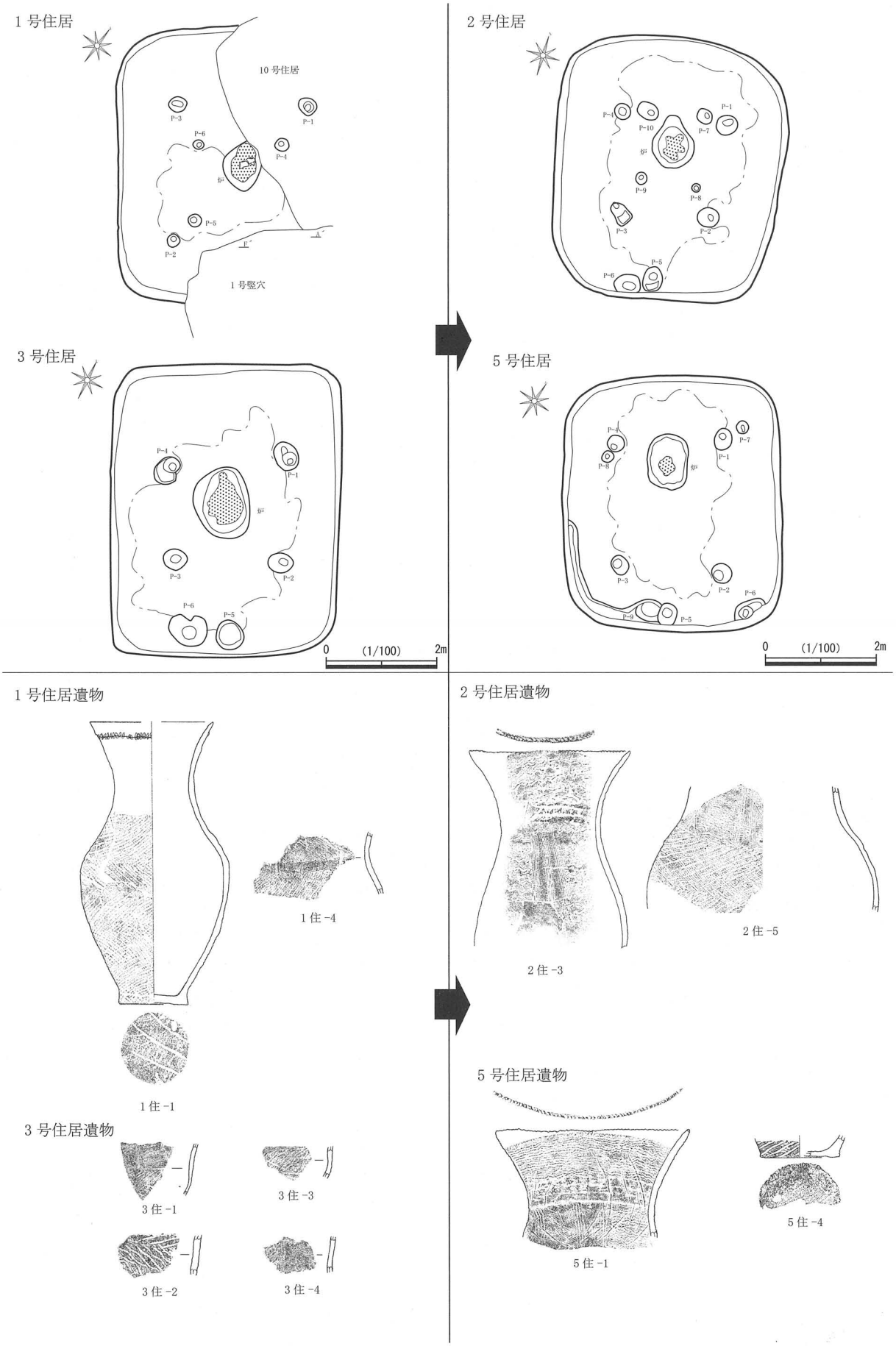
(1) 1・6・9・10号住居の残存率が100%でない住居の分類に際し，残存する炉や主柱穴の配置から短軸を想定した。

(2) 大～小型の分類は、海老沢稔氏の区分に依拠している。(『茨城県における弥生時代研究の到達点』2000)

(3) 海老沢稔氏「茨城県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』
第9回東日本埋蔵文化財研究会2000を参照した。

(4) 藤田典夫氏「栃木県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』
第9回東日本埋蔵文化財研究会2000を参照した。

(5) 長谷川聡氏「大作遺跡　大畑遺跡」『北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
1998年の「第4節　まとめ」において，胴部片に施文された付加条縄文の仕分けを行っている。

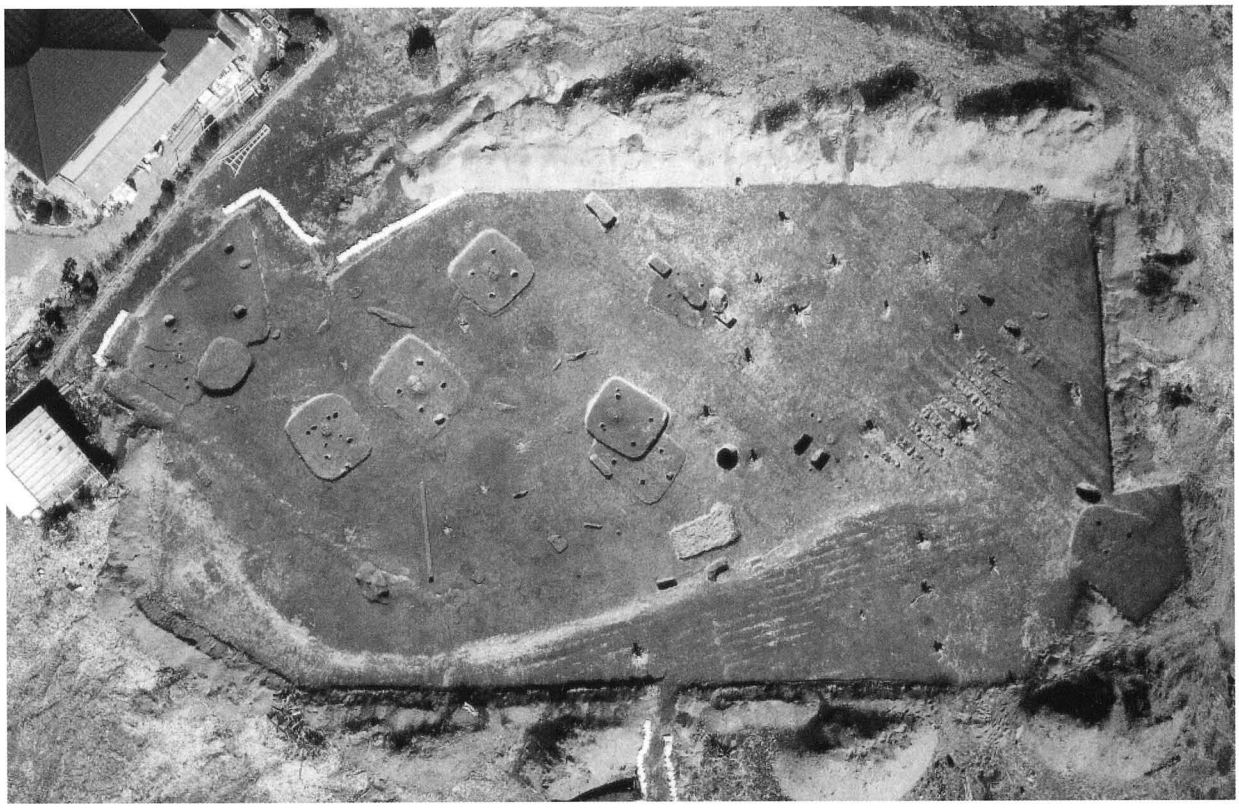


第 30 図　住居形態・出土遺物の変遷概念図

【参考・引用文献】

赤塚次郎編　『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集　1990年
飯島一生　「矢倉遺跡　後口原遺跡」
『北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
財団法人茨城県教育財団文化財調査報告第135集　1998年
飯島一生　「十王台式土器の相違を考える－矢倉遺跡と大畑遺跡の観察から」
『研究ノート8号』財団法人茨城県教育財団　1999年
飯島一生　「十王台式期における異系統土器文化圏との交流」
『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』阿久津久先生還暦記念事業委員会　2003年
茨城県考古学協会　『茨城県における弥生時代研究の到達点』
十王台式土器制定60周年記念シンポジウム　1999年
海老沢稔　「茨城県における弥生後期の土器編年」
『東日本弥生時代後期の土器編年』第9回東日本埋蔵文化財研究会
東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会　2000年
海老沢稔　「上稲吉式土器概説―霞ケ浦沿岸の弥生後期後半の土器群」
『霞ケ浦沿岸の弥生文化　土器からみた弥生社会』
霞ケ浦町郷土資料館21回特別展　1998年
川又清明　「涸沼前川流域における弥生時代後期の遺跡分布状況」
『研究ノート9号』　財団法人茨城県教育財団　2000年
近藤恒重　『大戸下郷遺跡―主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
財団法人茨城県教育財団文化財調査報告第216集　2004年
長谷川聡　「大作遺跡　大畑遺跡」『北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
財団法人茨城県教育財団文化財調査報告第136集　1998年
早川泉　他　『三本松遺跡』友部町三本松遺跡発掘調査会・大成エンジニアリング㈱　2003年
藤田典夫　「栃木県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』
第9回東日本埋蔵文化財研究会　東日本埋蔵文化財研究会福島実行委員会
弥生時代研究班　「茨城県後期弥生土器編年の検討（Ⅲ）十王台式土器について」
『研究ノート3号』財団法人茨城県教育財団　1993年
吉田寿　他　『小原遺跡』友部町小原遺跡発掘調査会・大成エンジニアリング㈱　2005年
綿引英樹・松本直人　『大戸下郷遺跡２―主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
財団法人茨城県教育財団文化財調査報告第257集　2006年
綿引秀樹　「弥生時代後期後半における文化の交差点「大戸下郷遺跡」―大戸下郷遺跡の弥生土器の出土例から」
『考古学の深層－瓦吹堅先生還暦記念論文集』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会　2007年

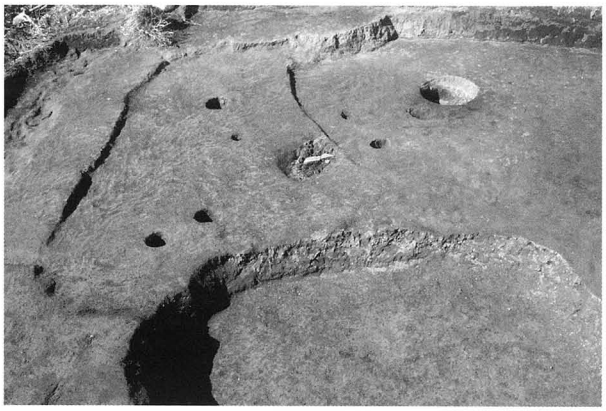
写真図版



調査区　全景　1（上・北）

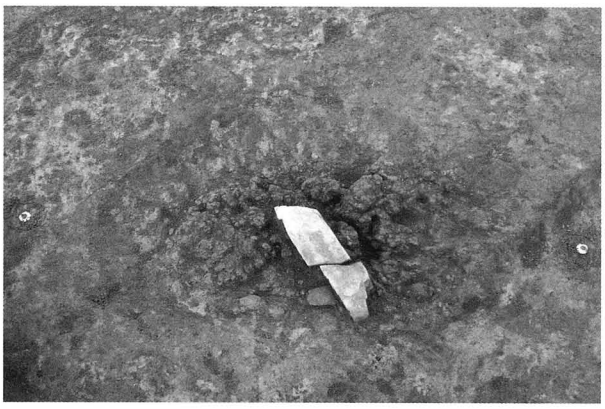
調査区　全景　2（上・北）

写真図版　2

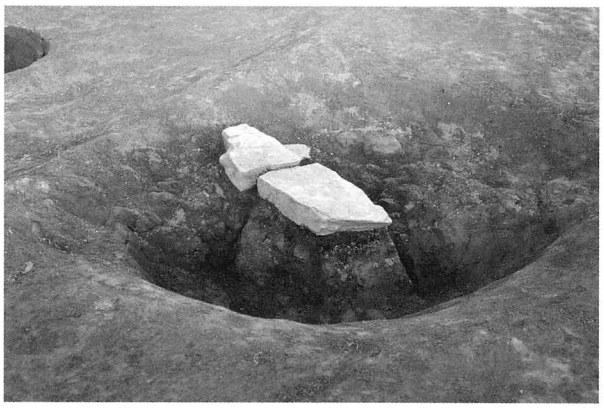


1 号住居　全景（南東から）

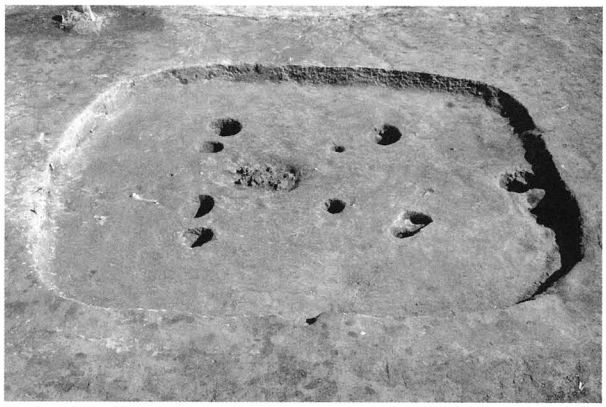
1 号住居　遺物出土状況（東から）



1 号住居　炉近景（南東から）



1 号住居　炉断面（南西から）



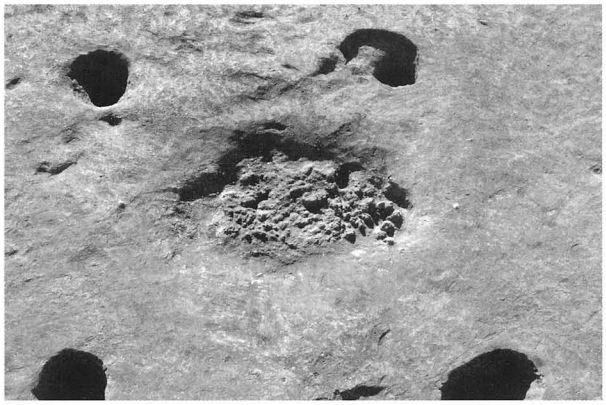
2 号住居　全景（西から）

2 号住居　遺物出土状況（南から）

2 号住居　遺物出土状況（南から）

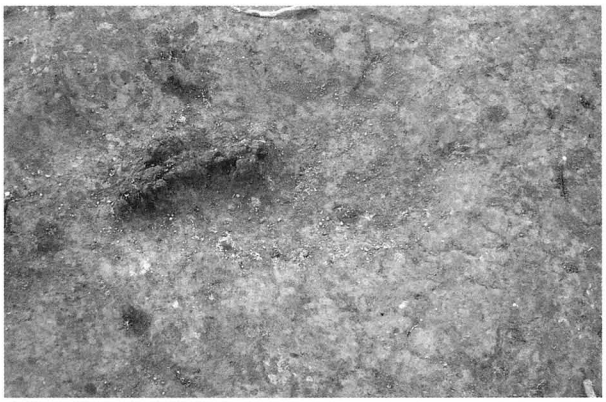
2 号住居　炉近景（西から）

3 号住居　全景（南東から）

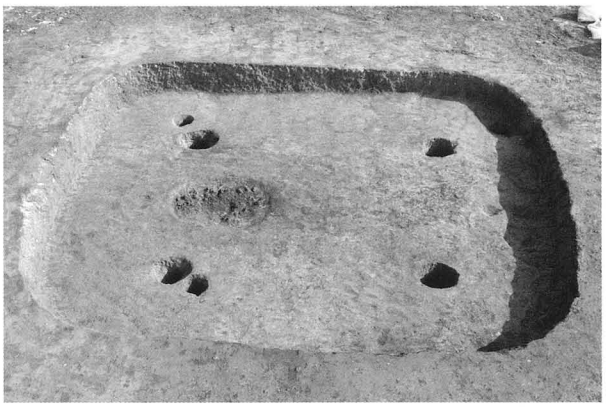


3 号住居　炉近景（南西から）

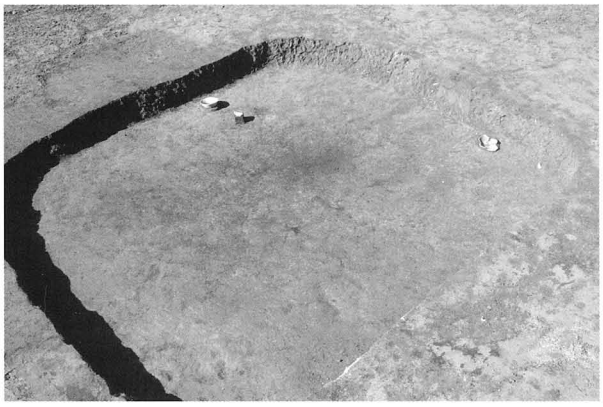
4 号住居　全景（南東から）



4 号住居　炉近景（北東から）



5 号住居　全景（南西から）



5 号住居　遺物出土状況（東から）

5 号住居　遺物出土状況（東から）

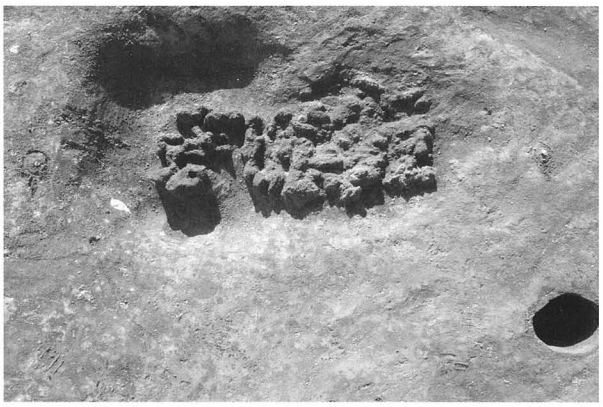
5 号住居　炉近景（北東から）

写真図版　4

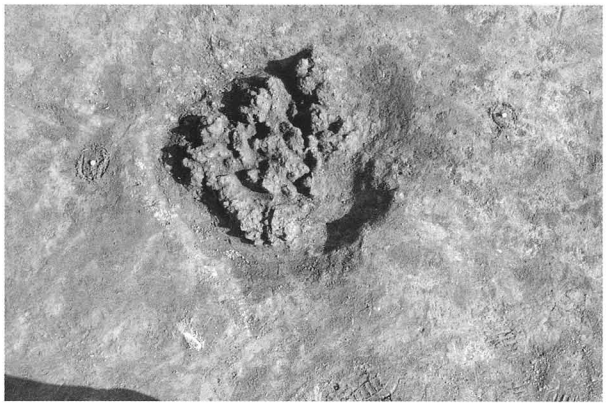
6 号住居　全景・遺物出土状況（南東から）

6 号住居 Pit-4　断面（南西から）

7 号住居　全景（南東から）



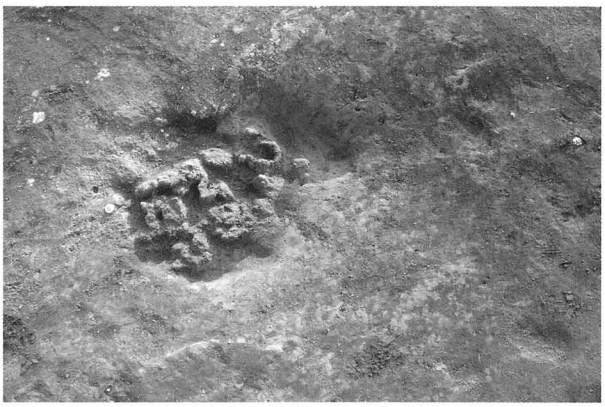
7 号住居　炉全景（北東から）



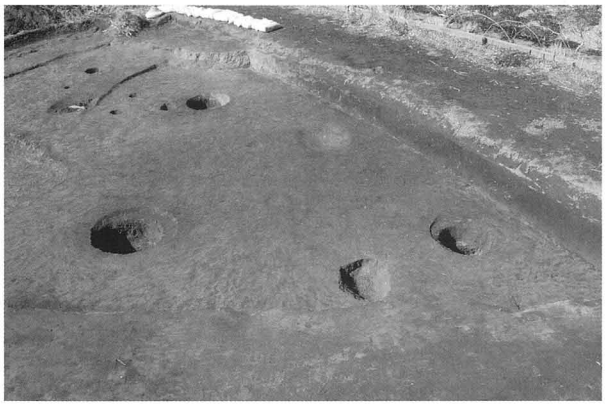
8 号住居　炉近景（南東から）

9 号住居　遺物出土状況（南東から）

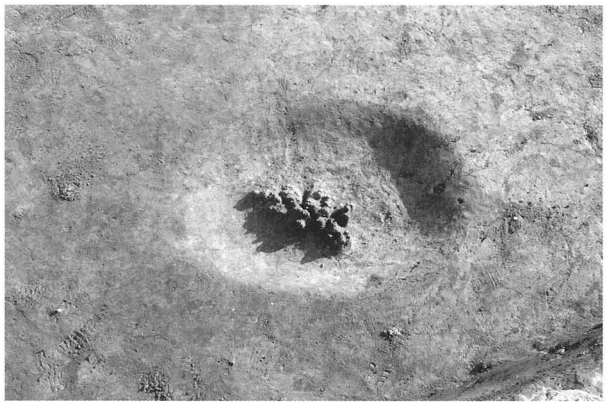
9 号住居　遺物出土状況（南西から）



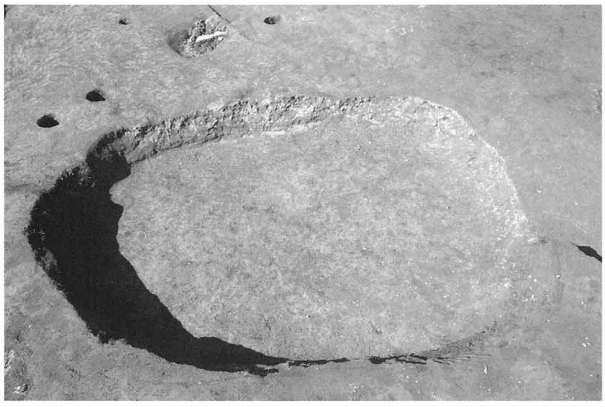
9 号住居　炉近景（北東から）



10 号住居　全景（南東から）



10 号住居　炉近景（北西から）



1 号竪穴　全景（南東から）

1 号竪穴　遺物出土状況（南東から）

1 号竪穴　遺物出土状況（南西から）

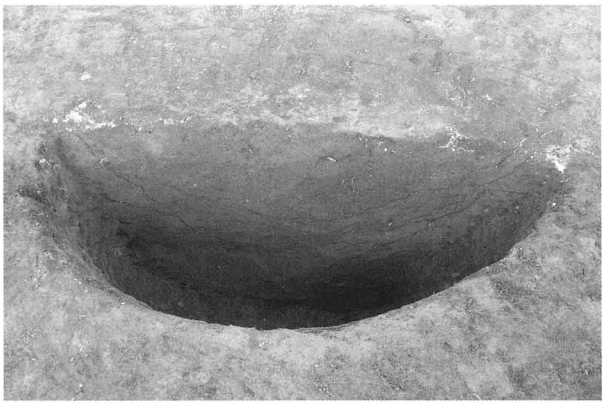
1 号竪穴　遺物出土状況（西から）

1・10 号住居・1 号竪穴　全景（南東から）

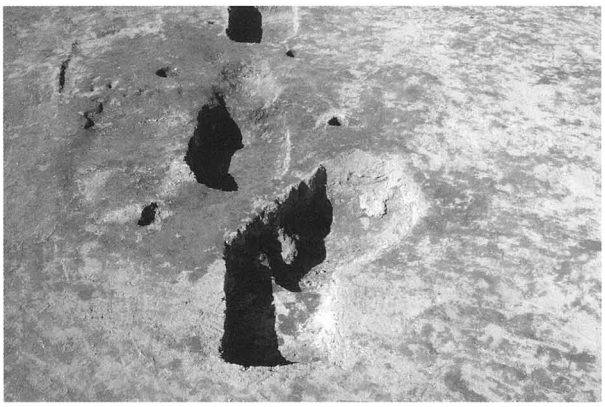
1 号溝　全景（南から）

写真図版　6

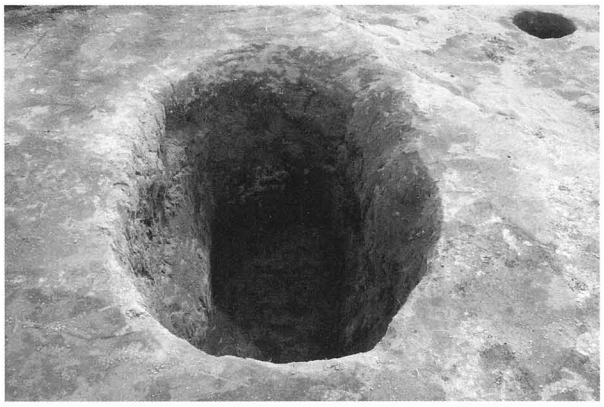
1 号土坑　全景（南から）



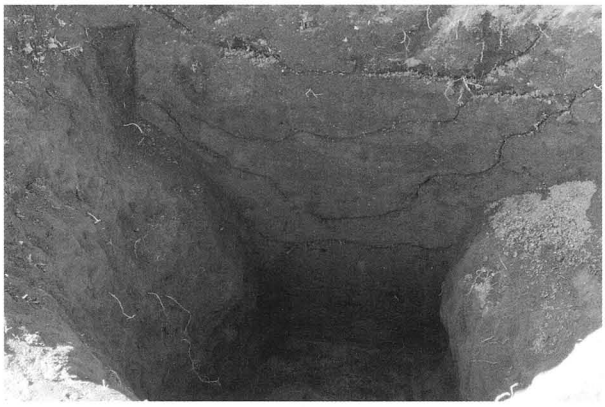
1 号土坑　土層断面（南から）



2・5・6 号土坑　全景（南東から）

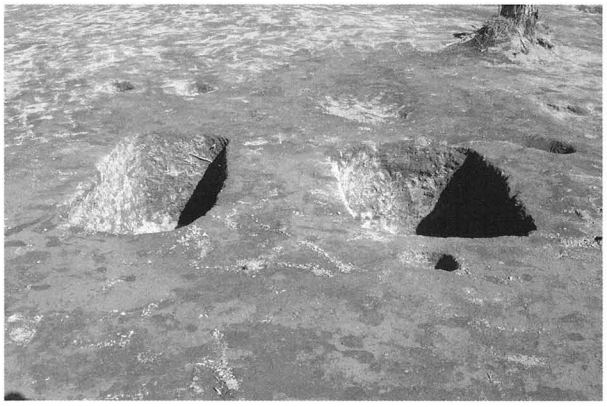


3 号土坑　全景（南東から）



3 号土坑　土層断面（南東から）

6・7・8 号土坑　全景（南東から）



10・11 号土坑　全景（西から）

12・13 号土坑　全景（東から）

1住-1

1住-2

1住-3

1住-4

1住-5

1住-6

外-1

外-2

外-3

外-4

2住-2

2住-3

2住-10

2住-13

2住-4

2住-7

2住-8

2住-9

2住-5

2住-11

2住-12

2住-6

2住-19

2住-14

2住-1

2住-18

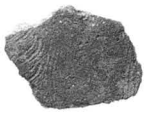
2住-15

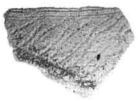
2住-16

2住-17

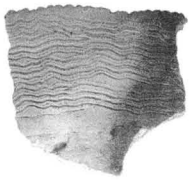
3住-1

3住-4


3住-2

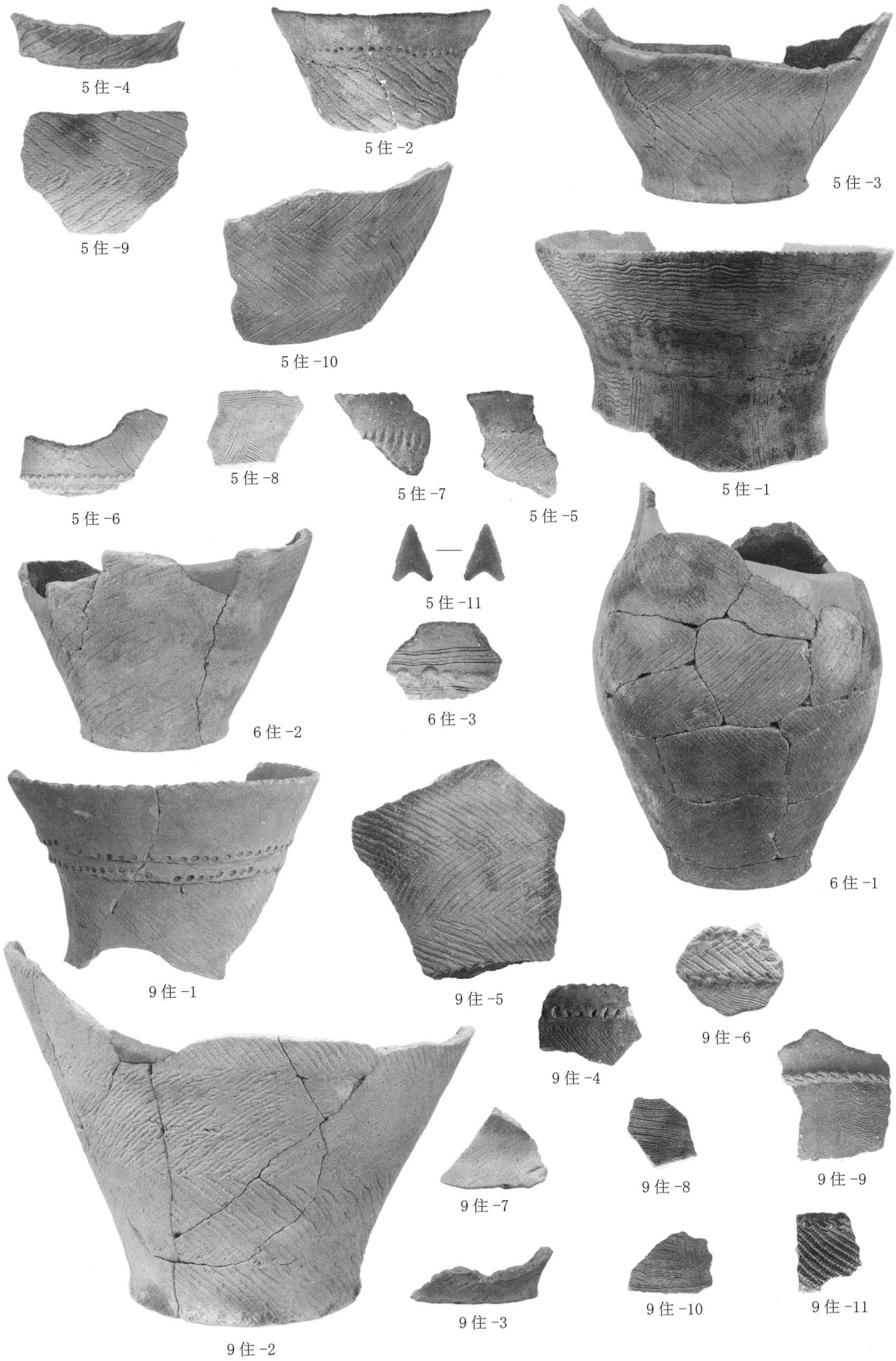

3住-3

4住-1


4住-2

4住-3

4住-4


5住-4
5住-2
5住-3
5住-9
5住-10
5住-1
5住-8
5住-7
5住-5
5住-6
5住-11
6住-2
6住-3
6住-1
9住-1
9住-5
9住-6
9住-4
9住-7
9住-8
9住-9
9住-2
9住-3
9住-10
9住-11

10住-2

10住-1

10住-5

10住-3

10住-4

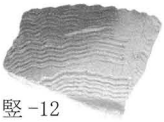
10住-7

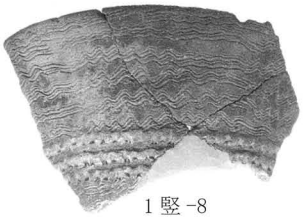
10住-6

1竪-1

1竪-2

1竪-18


1竪-12


1竪-8

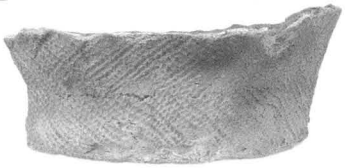
1竪-7

1竪-9

1竪-11

1竪-5

1竪-4


1竪-3

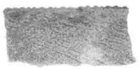
1竪-6

1竪-10

1竪-17

1竪-20

1竪-19


1竪-14

1竪-16

1竪-13

1竪-15

1土-1

報告書抄録

ふりがな	はんがい　いせき
書　　名	塙　谷　遺　跡
副　書　名	県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	笠間市教育委員会　・　高野　浩之
編集・発行機関	笠間市教育委員会／〒309-0294　茨城県笠間市石井717 電話：0296-77-1101
	㈱地域文化財コンサルタント／〒286-0201　千葉県富里市日吉台1-23-12 電話：0476-93-0770
発行年月日	2008年11月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
塙谷遺跡（はんがいいせき）	茨城県笠間市小原468外（いばらきけんかさましおばら）	08321	089	36°22′03″	140°19′57″	2008.02.04～2008.03.01	1,535㎡	県営畑地帯総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塙谷遺跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴　1基	石器（石鏃・敲き石）	
	集落跡	弥生時代	住居跡　10軒 竪穴遺構　1基	弥生土器（広口壺・ミニチュア） 石製品（管玉） 土製品（紡錘車・環状土錘）	
	その他	時期不明	土坑　13基 溝　1条	硬貨（1銭）	

要　　約	本遺跡は，涸沼前川の左岸に位置する丘陵地の先端部にあり，弥生時代の集落が形成されている。確認された遺構は，弥生時代後期後半の住居跡10軒，竪穴状遺構1基が主体となり，その他に縄文時代の陥し穴1基，時期不明の土坑13基，溝1条となっている。集落は，各住居から出土した土器より，十王台1a式並行期から十王台2a式段階までの時期に営まれたものと考えられる。出土遺物の中には異系統の土器も含まれていることから，涸沼前川中流域における弥生集落の位置づけが注目される。

資料の取り扱いについて

項　　目	内　　容
水洗い	・全て行った。
注　記	・次の略号にしたがって遺構番号、出土位置の順で注記した。 遺跡略号　　調査年月⇒0802　塙谷遺跡⇒ハンガイ　　遺構⇒SI：住居跡　等 例）0802ハンガイSI-01 尚、注記不可能な細片については、同様の内容を明記したビニール袋に収納した。
接合・復元	・接合は接着剤を用い出来る限り行い、復元は全ての遺物に対して行った。
実　測	・遺物実測図は、報告書掲載分についてのみ作成した。 ・遺物実測図は、図面ケースに収納している。この際、拓図が伴う場合にはコピーを添付している。
台　帳	・図面台帳、遺物台帳、写真台帳があり、それぞれの資料が検索可能であるように作成した。
出土遺物収納状況	・遺物は、報告書使用と未使用に分けて収納箱に収め、収納箱には収納内容を記載してある。
資料の保管場所	・笠間市教育委員会

茨城県笠間市
塙谷遺跡

印刷　平成20年11月20日
発行　平成20年11月25日

編集　株式会社　地域文化財コンサルタント
〒286-0201　千葉県富里市日吉台1-23-12
電話　0476-93-0770

発行　笠間市教育委員会
株式会社　地域文化財コンサルタント

印刷　株式会社　ライフ
〒286-0134　千葉県成田市東和田595
電話　0476-24-1564